明治二十六年二月二十日發行

女鑑

第三十三號

東京國光社

女鑑第三十三號目次

佐竹侯夫人



女鑑 第三十三號

女鑑

遜讓は禮の本

人の人たる所以の者は、禮あるを以てなり。君は臣を養ひ、臣は君に忠す。義なり。父は子を慈み、子は父に孝す。親なり。夫は婦を親み、婦は夫に事ふ。別なり。兄は弟を愛し、弟は兄を敬ふ。友なり。朋友は互に誠を以て交り、敬を以て接す。信なり。此の五倫の道の、人に欠く可からざること、猶天に日月あるが如し。若、天に日月なくして、晝夜を照らさずは、萬物何に依りて以て生育せむ。若、人に禮なくして、進退を節せずは、社會何を以てか秩序を保たむ。千萬の制令、億兆の法律ありと雖も、猶社會の秩序を維持するは禮にあり。今世の人、皆

制令法律を以て、維一の治世の要具と誤想すれども、制令法律は、抑末なり。其の本亂れて末治まる者は非ず。禮にして亂れむか。制令法律何の功かあらむ。禮なるかな。禮なるかな。而して禮の本は遜讓にあり。遜讓とは何ぞ。己を卑うして人に驕らず、己を後にして人に先だゝさるを云ふ。故に、一家遜讓ならば一家治まり。一鄕遜讓ならば一鄕治まり。一國遜讓ならば一國治まり。天下遜讓ならば天下治まる。天下、若此の如くならば、制令法律何の要か有らむ。若、之に反して、一家遜讓なからむか。父子夫婦兄弟、互に相反目して、一家爲に亡ぶるに至らむ。一鄕遜讓なからむか。親戚朋友、互に相反目して、一鄕爲に亂るゝに至らむ。一國一天下にして、遜讓なからむか。君臣主僕、互に相反目して、國は滅び、天下は亂るゝに至らむ。若此の如くならば、如何な

る制令法律ありと雖も、何の功か有らむ。故に、制令法律は、遜讓の德によりて行はるゝ者にして、單に獨立すべき者に非ざるなり。

然るに、近代に至りては、往々遜讓の禮を打破し、制令法律のみを以て、社會を制裁せむと希望する者あり。就中、耶蘇敎徒に尤多きが如し。此の頃、衆議院に提出したる横井たま子外百餘名の女子の如き、以て見るべきなり。彼等は、如何なる妖霧の中に彷徨せるにか。其の迷へるも亦甚し。蓋、耶蘇敎にも、善き所あらむ。然れども、我が國には不適當なり。彼の歐州諸國の、未開化せずして、人人其の心を異にし、道德未備具せずして、箇々其の行を恣にし、弱肉强食の時代にあたり、耶蘇敎を起して、人心を收攬し、行爲を畫一ならしめ、妖雲漠々たる歐州の天地をして、清明潔々たらしめたるは、實にクリストなり。凡て、宗敎の

社會に必要なる所以は、人心の道德を維持するにあり。故に、歐州諸國には、耶蘇教も必要ならむ。然れども我が國には、古來歷史上、天地自然の道德、皓として備れり。一も耶蘇教の力を借りたることなし。其の道德ハ、即、前に所謂遜讓の禮なり。此の禮を以て、紀元三千年の久しき間、一日の如くに維持し來れり。世に盛衰あり、時に汚隆ありと雖も、常よ、此の禮を以て制裁を加へたるが故に、五倫の道は、終に今日迄滅絶することなかりき。是、天地自然の道の、獨我が國にのみ存して、外國の如き人爲の道に非ざるを以てなり。儒者は、支那の儒道によりて、我が國の道德は維持せられたるが如くに云へども、決して然らず。其の故は、儒道の本國たる支那を見よ。其の風俗習慣、果して我が國の如くなるか。已に我が國の道德にして、儒道の爲に維持せらるゝ者とせば、支那は其の本

國たるを以て、我が國よりも盛ならざるを得ず。而して其の然らざる所以の者は、我が國には別に其の本あるを以てなり。其の本とは、即遜讓の禮にして、遠く開國の初より起りて、天地自然の道なれば、天地の有らむ限は、盡くべき者に非ず。又滅絶すべきにも非ざるなり。然るを、大膽にも、之を打破して、代ふるに耶蘇教主義を以てせむとす。誤れるも亦甚し。禮なるかな。禮なるかな。烏に反哺の孝あり。鳩に三枝の禮ありとかや。我が女鑑購讀の姉妹等よ。謹みて、遜讓は禮の本たることを忘るゝこと勿れ。

論説

惟神の婦道

久米幹文

婦の夫に先立まじきは、我皇國の禮なり。神代にいざなぎの神、いざなみの神と、はじめて男女の形を具へ給へる神あり、天つ神の勅をうけて、國を造り、神をも生いでんとし給ふに、まづ夫婦の婚禮を修めて、天の御柱をめぐり給ふ時、女神まづ言あげして、男神後に答へ給ひしかば、不具なる御子生れ給ひぬ。こゝにあやしと思して、天つ神の御敎をこひ給ひければ、天つ神太占にうらへて宣ふ樣、女の言さき立ちが不祥なれば、改めてめぐりいへと宣ひぬ。即ち御敎の如く、又天御柱をめぐりて、此度は男神先言揚して、女神後に答へ給ひしかば、よき御子生れぬ。つぎ〳〵、めでたき御子あまた出來て、國作の大業をなし遂給へり。是人間の夫婦のはじめなるに、天つ神殊更に、世の人を天益人と名付給ひて。子孫のいや益に、ふえひろがらん事を願ひ給へり。故に男は妻妾を娶る事あれども、

女は夫をかさねざるが古の禮なり。されば、大國主神の御妻なる すせりひめ命の御歌に「我大國主こそ男に在せば、うちみる島の崎々、かきみる磯のさきおちず、わが草のつま持せらめ、われはもよ女にしあれば、汝を置て夫はなし、汝を置てつまはなし、」とうたひ給へるぞ、萬世の鑑なるべき。されば、男は妻妾を養へども、愛情片よらず。女は一夫を守りて、志操をかへぬぞ、神ながらの道なる。

血統を重んじて、縁組を愼むは、古の風なり。されば素盞嗚尊は、くし稻田姫の父母の名を問給ひて、汝の女を我にくれよ、と宣ひしかば、其父母も、先素盞嗚尊の御名を問奉りて後にこそ、女は奉らんと申しつれ。又天つ彦火のにゝぎの尊は、木花さくや姫命を、直にめし給はんと宣ひしかば、姫命は、われは申さじ。父の大山祇神申さんと申し給ひ、又神武天皇は、正妃を立給はんとて、よき血統

を選びまして、事代主神の女、姫たゝら五十鈴姫を選取り給へるをはじめとして、歴代皇后を立給ふに、必ず神胤皇胤の貴族を選みて、みだりに諸臣の女の才色をはとり給はぬなり。されば、下は上にならふ例にて、今に至る迄、田舎の民すら、其程々に付いて、統を正して縁を求むるは、これも神ながらの風なり。

（以下次號）

女子要言（第二回續）

三輪田眞佐子

第八、女德の標準　抑も平和の源、仁義の基なる女德の標準にして、單に想像上の假搆に出でんか。世の新陳代謝と共に、時々變更せざるを得ず。將流行の風俗とせんか。各自の好惡に伴ひ、歳々移動せざるを得ず。而して若、其の女德、善良

の潮運に向ふ時は、幸なりと雖も、一朝卑賤の傾向を來たさば、何の辭を以て、之を矯正せん。吁。其の害恐れざるべけんや。然れども、人道は素、毫も由る處なく、徒に偶然の放言より起こりしものにあらずして、宇內の大勢原則と、一致するものなり。故に假初にも、之と抵觸せんか。如何ぞ人道とするに足らんや。請ふ、其の爾る所以を述べん。

誰か言ふ。石鐵浮び、毛葉沈むと。若能く此の理を解するものあらば、能く宇內の大勢原則を知るものなり。宜なる哉。古より衆に秀で、道を知るものは、悉く自然現象を愛せざるなし。而して亦、已之に法らざるなし。孔夫子の、川上に在して、逝く者は斯の如しと曰ひ、孟子の、水の低に就くを見て、性善を知り、耶蘇の、野に咲く百合の花を賞して、天工を悟りし如き是なり。故に我々虛心にし

て、河風蕭々として、千鳥鳴くの折に觸れよ。人情の切なるを覺えん。邈々たる碧海に臨んで默想し、輝々たる日没に對して沈思せば、自ら勸善懲惡の訓誨とならん。其の他宇内の光景、一として人道の源をなさゞるものなし。五條の三位藤原の俊成卿が、「世の中よ道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」と詠せしは、千万無量の意味あるべし。

今女子に就いて考ふるに、葛蘿の喬木に寄るを見れば、易に云ふ柔皆順乎剛の理を悟り、以て女子の男子に譲り、妻の夫に從ふ原則を推すに足らん。女子に奪ふべからざる雅致ある玲瓏たる女性の月、水底にありて、益幽妙なるが如し。岩石の罅間を流縫するものは、柔輭なる水にして、女子の男子より周密なるも、其の性に外ならず。竹稍雪に壓せられ、而して其の緑色、愈濃かなるは、以て女

子の貞操に比すべし。由之觀之は、以上述べし女德の標準は、悉く宇內の大原則に准ずるものなり。蓋し此等は、決して附會の說にあらず。孔子の靜なる仁者は、山を樂み、動く智者は、水を樂むと曰ひしは、必竟人の性は、各自然の光景と、流通する眞理を敎へしものと云ふを得べし。左れば此の道理よりして、風土の異なるに從うて、自然人類も、多く影響を受くべきものなるを、了解せざるべからず。例之は、甞て聞く。印度の女子は、氣候の關係にや、十歲以上となれば、最早老衰するを以て、止を得ず、男子一生に、二三人の女子を娶るにあらずんば、社會を繼續するを得ずと。果して信ならば、勢ひ此の國には、一夫一婦の說も行はれ難きが如し。他、之れに類するもの多し。左れば日本女子は、飽くまで、日本の天然なる習慣、及び作法と相待ちて、女德を施さゞるべからず。然るに近來、

我が國の女風を野蠻視し、西洋に心醉するものあるより、正に朝日に薫ふ大和の女德も亂れんとす。吁。吾今は「いにしへの野中の清水ぬるめどももとの心をおる人ぞくむ」と。古歌を假りて、聊か言外の意見を顯はすのみ。然れども、未だ我が女風完美なりと言ふ能はず。西洋の女德、惡弊のみと斷じ難し。孔夫子の、周は二代に監み、郁々乎として文なる哉。吾は周に從はんとの一言は、周の文明、夏殷を取り合はし、以て遂に大成せしを賞揚せしものなれば、我が女德は、依然として萬古不易なる、彼の蒼天を標準として、以て古今東西に拘泥せず、彼是折衷して、唯善良なるものに從ひ、はちす葉の濁におまぬ心たらんことを期せさるべからず。

（未完）

自得會席上白鹿洞書院の掲示を説明す

棚橋絢子

今日は天長節にて、　聖壽万々歳を奉祝と同時に、天長地久なる學問の隆盛を祈り、併せて本會の爲に、自得の要領を述べて、宋朝の大賢人朱文公の、白鹿洞書院に於いて、生徒に掲示せられた條目迄に解き及ぼし、極平易に、講釋めいた御話を致さうと存じます。偖諸孃は、大方學校の卒業を以て、學問を仕上ると云ふ御見込で有りませうが、其れは大きな御見込違にて、學問修業は、一生の受負仕事にて、是でよいと云ふ免状は、昔からどんな大家先生でも、とつた人はありませぬ。まして書生分上にありては、學校の卒業位は、御定まりの課目を通過したと云ふばかり、はんの初歩であります。眞の卒業は、聖人となりまして後の

事、一生勉強した所が、先むづかしい話で有ります。さういへば學問は、畢竟骨折た所が、益のない仕損と云ふもの、やめの方が近道の樣に思はれますが、決してさうでは有りませぬ。なぜと云ふに、人の人たる道を學ぶので、なにも六かしい筈はなく、勉強さへすれば、初めはいやよもあり、つらくもあり、窮屈にもあり、窮屈な氣詰りな仕事の樣に思はれますが、不斷してゐますと、其の內に何時しか、夜のあけた樣になり、いやと思うた事も、窮屈にもなく、氣詰りにもない樣になり、先生の手をはなれ、學校の督責を離れても、自由に應用が出來、吾と我が心に、面白いと云ふ觀念が生じ、古人の所謂、已めんと欲するも能はずと云ふ場合に立至ります。是が即ち自得の本領にて、學問が我物となつた兆候で有りますから、先假の卒業と申しても、過では有りますまい。併し是でよいと油斷は

出來ぬ。時々刻々に省察と申して、氣を付、克治と申して、已れに克つ工夫を持續して行かねばなりませぬ。此工夫に、間斷がなく進んで行きますと、百も二百も長生をすると、聖人になるかも知れません。其の積り積つた德義の結果が、子に及び孫に及び、家よりして國、國よりして天下と、次第〳〵に推し擴めてまゐりますと、天長地久永遠無窮、都大路の縱橫に行き至らぬ限もなく、上下貴賤、老若男女を擇ばず、誰も踏まで叶はぬ道が、學問の大体で有ります。大体ばかりでは、譯の分からぬ者故、其要点を學的として、朱子が揭げ示されたもので有ります。今其本文を、左に一々說明を致します。

父子有親。君臣有義。夫婦有別、長幼有序。朋友有信。

此五倫が首で有ります。支那の堯舜と云ふ聖王の時、契と云ふ名臣に命じて、五

敎を布かしむと、書經に見えたるは、此の親義別序信で有ります。親の字を平たく云へは、間て心のないと云ふ程のこと、義の字は、筋道が立つてあると云ふ程のこと、別の字は、なれ〳〵しくないと云ふ程のこと、序は後と先の次第があると云ふ程のこと、信は約束を違へぬと云ふ程のことなり。五敎といへば、堯の腹から出て、契の口より傳へ、聖人だけの相談で、出來た樣に聞ゆれども、天地間の實理であるから、父子君臣五者の、未生以前に備つて居て、已生以後に、發見したるものに相違はなし。其故有親と云うて、可親とはいはず。有義と云うて、可義とは云はず。別序信も、皆其通り。有とは自然の言葉にして、可とは命令の言葉なり。此の區別を合点して、敎の强ひつけたものでないと云ふことを知り給ふべし。かく明白の道理なれども、百姓日用不知ともいへる如く、凡民は、已

れが㕝を已れで支配は出來ぬ故、君師の任に居る人が、敎を布かではならぬ譯も、亦合点が行きませう。學問の大本は、此五敎の外は有りませんが、其條目が又五つ有りまして、博學、審問、謹思、明辨、篤行是なり。博學とは、雜駁に、たくさん本を讀めと云ふ譯ではなく、五敎の道理を、博く賢師友に就いて學習し、精しきが上にも精しく、審なる上にも審にせよと云ふ㕝、審問とは、前に學んだ㕝に慥ならぬ處、疑はしきふしは、委しく問ひたゞし、はつきり合点の行く樣にする㕝、此二つは、つれ立たもの、學んだ計りでも、問うた計りでも行かぬ故、學問と申したもの。謹思とは、學んだり問うたりした㕝を、それなりけりにして置かず、謹愼に思慮分別して、層歩を進むる㕝、論語に學而思はざれはくらしとあるは、此譯にて、學ぶと思ふとも、やはりつれ立たもので有ります。明辨とは、

思うて得た以上は、已れが了簡を以て、明かに辨解し、人にも益を及ぼすこと、篤行とは學問思辨の卒業にて、手篤く身に行つて、之を實にすること、五つの内、最も大切の目にて、此一つが缺けますと、前の四つは皆空論になります。此順序を經て、一々履行すれば、言行一致で有ります。其内學問思辨は、道理を窮め知ることにて、篤行は身を修め、事に處し、物に接するの三つに應用せねばなりませぬ。修身の要をいへば、言忠信、行篤敬、懲忿、窒慾、遷善、改過、此六つで有ります。言忠信とは、凡そ言語文字の間に發見する者は、皆言にして、少しも自已の作爲を用ゐず、生み付けられた儘の天理通りにして、眞實無妄の處を云ふ。行篤敬とは、行ひは即ち親義別序信にて、手厚くして浮薄ならず、敬ひ愼みて放僻邪思のなきをいふ。凡そ七情の中にて、極めて制し難きは怒氣なる故、殊更に

ぬき出して、懲すとは云ひたるなり。慾の種類多けれども、其初め一念の微に起りて、國家を覆へし身を亡すに至る、恐るべき者なれども、獨知というて人は知らねども、己れだけは合點して居る故、微なる中に、是を窒げとは云うたものなり。窒ぐの字下し得て味ありと思はれます。遷善とは、人の善行を見て、我身もかく有りたしと羨み願ふとにて、願ふ計りでなく、それになりすますを云ふ。改過とは、一度過と知つた以上は、再び之を踐まず、惜しげもなく、すつぱりと改め易ふるをいふなり。遷ると改むるは、二つにして一つなり。處事の要をいはゞ、正其義、不謀其利、明其道、不計其功、是れなり。義とは筋道を正して、少しも私のなきと、利とは何事によらず、爲にすると云うて、先に目當のあると、義と利とは、正反對にて並び立たぬ者故、目當のある相談を止めにして、義理の一筋に

歩を向けよと云ふ意味、功は道に付いて廻るものなれども、道が明かならぬ故、功の方計りへ心を傾け、道理の是非に頓着せぬが普通の人情故、先道を明かにせよと諭したものなり。此一部は頗る高尚にして、女子の學問には縁遠き様なれども、よく氣を付けて見れば、平生の交際上、日用事務の間に、いくらもあるぞ、近く譬をとり、書物を死物にせぬ様、御考が大切で有ります。接物の要といはゞ、己所不欲勿施於人、行有不得反求諸己、とある是なり。己所不欲とは、自己にいやと思ひ、堪へられぬと思ふぞ、勿施於人とは、身をつみて人の痛さを知れと云ふ諺の如く、思ひやりがありて、己れがつらきぞは、人にもさせぬと云ふ意味、即ち仁の方法、行つて得ざるあるとは、己れは十分善を盡した積りでも、人の感じがそれ程にないぞ、諸れを身に反求せよとは、右の場合に臨んでは、人を

危めやすきものなれども、そこを一寸考へて、是は全く我身にまだ至らぬ處がある故、人が思ふ樣に行かぬと、其罪をふり反つて、我身に求めよと云ふと、凡そ學問の心得は、こゝが大事であります、是迄が掲示の文を、ざつと解釋したので、天長地久、永遠無窮、己れを治め人を治むるの道、此外は有りますまい。凡そ學問に規則を立て、當てはめると云ふと、本來の道理にはづれたと故、此掲示は、吾から德に進み、業を修むる大端を序列して、深切に示された者、こゝさへ自得すれは、世の風潮に左右せらるゝと云ふとも、時の流行に奔波すると云ふともない筈と思はれます。ちと話が高尚に渡り、御退屈さま。

こは女子成立學校の、自得會席上演舌の料にとて物せしが、時間なくてやみにたるを、今ゆくりなく本紙に載することとはなりぬ。さるからに、前後の文意、心得

がたき節もあらんかとて、一渡りことわり置くになん。

史談

佐竹義隆侯の夫人の事

三木五百枝

佐竹義隆侯の夫人は、同じ族なる左衛門尉主の姫君にて、夙くより賢良の聞えあられき。夫人は二人の子息を生まれたりしが、兄君を右京大夫義康と申し、弟君を壹岐守義知と申したり。弟君幼くおはられし時は、左京と申し、江戸本所にて育てられ、兄君は下谷鳥越なる邸に住居せられき。その程の事なりとか。夫人のいはれけるは、親のその子を愛しみ、子のその親に敬ひ事へまつるは、自然の性情によるものにて、子供等の心まゝせにすとも、兩親の愛しむにつれ、孝行をも盡くすに至るべし。されど兄弟かたみに、友愛の誠あらしめむことは、父母の常々敎へ悟して、その道に違はぬやうせしむるこそ、よけれといはれぬ。よりて或る時、二人に向ひていはれ討る其、左京よ汝は、三日のうちに一度づゝは、必ず鳥越なる邸へゆきまして、兄君の

起居をうかゞふべし。これ兄君を敬ふ道にしあれば、寒きにも暑きにも、風吹かむ時も雨降らむ折も、それらを厭ふことなく、弟の身に生まれたる者の務と思ひて怠ることを勿れ。また右京も、弟が行きたらむ時は、よく〳〵これを勞はりて、稽古の事などをば、互に心づけ心づけられつして、共に修行し勵むべしと。懇にいひさとされぬ。かくて弟君は、よく夫人の言を守り、夏の日冬の朝をとはず、その日限に違ふことなく、馬に乘りつゝ兄君の許を訪はれたり。さるに弟君は、もと壯健ならぬ性にてあられけれど、家の老ども、その艱難を、いといたはしく思ひ、より〳〵うち寄りて話し合ひ、遂に止め申すべきに決しぬ。かくてその中の一人梅津某といふ者、或る日夫人に對面をこひて申しけるは、左京樣御事、いまだ御幼年にあらせらるゝに、三たび日を經るうちに、一度づゝ下谷に渡らせらるゝ事、いと御いたはしくこそ候へ。ことに御病身にましませど、風ふき雨降らむをりなどは、必ずしもその日と限らせらるゝにも及び候ふまじ。空はれ風なぎたらむ時、御馬を出だされむかた、然るべく候はむにや。この事某一人の心のみには候はず、同列共同じ思に候へど、かく願ぎまつるになむと申しぬ。夫人熟々聞きていはれけるは、其方達の

心遣は、いともうれしく辱けなし。さはいへ、孰れもの心を附けらるゝ所、少か妾の心に落居ぬふしのあるなり。妾賢らだちていふにはあらねど、まづ一わたり聞き給ひね。凡そ人の親となりては、子を愛しく思ふこと、他人の考ふる程よりは、一層まさるものぞかし。古き歌にも「世の中に思あれども子を戀ふる思にまさる思なきかな」とさへ詠みたり。其方達も、妾か胸の思を知らるれこそ、かくはいはるるならめど、熟らく思ひ見らるべし。子息達今にも成長りて、上様の召使ひ給はむをりには、熱しとて寒しとて、そを厭ひ嫌ふことはなるまじきなり。さらば年若き程より、掟を定めて馬をも乘り習ひ、雨にも風にも吹き晒され、種々の辛苦に遭居てこそ、つらき役儀をも、撓まず怠らず勤めはつべけれ。今多くの苦をせさするも、後の爲を思へばなり。また今の大御代は、いとも泰らかなれど、太刀刀は袋に入れられ、鎧兜は櫃の中に納められぬ。それすらすでに幸あるに、家居も廣く衣食も足り整ふまで、厚き御恩に澤へれど、いかなる事をもなして、それに酬いまつらむとすべきなり。されば幼くはあれど、左京の三日に一度づゝ、鳥越の邸へ勤をなし、それより自づからが宅にて二日休息ふ廿、いと長閑なることとなりかし。其方達の先

祖は、乱れたる世に生まれあひ、多くの艱難を經つゝ、忠勤を盡くしたり。また故の中將様とても、風ふき雨ふる中に、野陣など張らせ給ひしは、遠からぬ程の事どもなり。それらを苦勞とするは、老人隱居などの身の上にこそ。されば左京事は、兄君を訪はむため、よし雨露にうたれしために、命の終はらむとも是非なしと思ひさだめたり。何事も古に引比べつゝ考へ見れば、今の世の辛苦は、いとも容易き事なるべし。されど左京をも、必ず哀と思ふことなく、諸事怠りなく勤めいそしむやう、よく〳〵諫めて給はるべしと。懇にいはれければ、梅津も大に感じて退出でぬとぞ。夫人の如きは、まことに其の子を愛しむ人とこそ申すべけれ。

おとめが事

柴田龜太郎

花は、盛りに開きて、匂ゆかしき折は、人々めではやせど、散り果てゝは、人のとぶらふものも絶えぬ。されど人のよき行は、後の世如何にへぬるとも、其の譽は散りもせざれど、また失せもせざるなり。こを思へば、人は善き行をせずしてやまんや。如何に悲しき事、苦しき事に逢ふとも、其の心をまげざれば、やがて其の報

は來て、後の世の人々までも、もてはやすぞや。まして婦女の身に於いては。

今は昔明應の頃、武藏の國、豐島郡に、和田靭負といへるものあり。そが女をおとめといひ、みめかたちいと美しく、且心やさしきものなりしかバ、我が妻にと思ふものあまたありしが、終に落合村の小川左衞門といへるものヽ妻となれり。常にいひけるは、婦女の夫の家にとつぐは、我がまことの家にかへるなり、故に古の文にも、歸とこそはかきけれ、されど若、夫の意に悖り、妻ならぬ道を行ひ、夫の側に侍る能はざることあらバ、そは世の中に家なきものにて、彼のむくつけき乞食、かたゐなどいふものにも劣りたるものなり、こを思へバ、妻たるものは．よく夫に順ひ、夫の親は我が親よりも、心をとめて仕へまつるべきなりと。かヽる心みさを、やさしきものなれど、よく夫に仕へ、年比いと睦じく暮しけり。然るに夫左衞門と、交深き村山三郎といへるものありて、はからずおとめを戀ひ、人しれず文などあまたおこせたるを、手にだに觸れず、獨心の中にうたてき事にのみ思ひ居たりしを、こたびは人なき所などにて、みだりがはしきわざ、せんずるさまに、いよ〱悲しく、兎やせんかくやせと、心を千々に碎きて、ひたすら三郎の心改めん事をのみ願ひゐたり

しに、三郎はおとめの我が心に從はざれバ、いよ〳〵惡しき心を起し、隙を窺ひて、おとめを奪ひ取らむやと謀り、一夜小川の屋敷に忍び入りて、もとより案內はよく知りたれど、左衛門の臥戸に覗ひ寄り、終に刺し殺しぬ。おとめは此の物音に目覺めて、いたく驚き、手早く長刀を打振りて、三郎が足を薙ぎければ、堪へ得ずして倒るゝを、尙も斬りつくれど、狂ひまはりて死にけり。おとめは長刀打ち棄てて、夫の屍に縋りて、泣き悲しみ、直に長き黑髮を、根元より切りすてぬ。さて其の夜、月の限なく澄み渡りけれど、

かぎりあれど月も今宵は出でにけり昨日見し人今日はなき世に

と書きつけて、夜明くれど、なく〳〵野邊の送りなど懇に營み、そのほとりの、川邊にさまよひ行きて、

かはりぬる姿見ずとや行水にうつす鏡のかげもはづかし

とよみて、夫の跡を慕ひ、身を投げて果てけりとぞ。下落合なる、すがた見の橋といへるは、其の舊跡となんいひ傳へける。常に己れ自ら戒めし言の葉を散らさで、其の操のいと正しき、其の心根のをゝしき、聞く人淚をしぼらざるものやある。諸孃

たちよ。おとめの様を哀れとおぼさで、行を慎しみ給ひねかし。これこそおとめには、てよなき手向なるべけれど。

家政

看護法捷徑（十）

三笠舎主人

（十二）病者飲食

一病者の食物及飲料は、總て醫士の示命する處に隨ふべき事、勿論也と雖、其食物及飲料の、品種、分量、調理、幷に給與の方法、時間等の規定は、亦看護の任に當るものゝ、熟知すべき一大要件なり、

二病者の食物は、新鮮にして消化し易く、滋養多きものを撰ぶべきは勿論、特に調理法に注意し、美味にして食機を進むる様に製すべし、最も病者に適する食物は、粥、肉汁、鷄卵、牛乳、等とす、

三米粥は、日常製する法に從ひ、大抵一時半許徐に煮熟するを良とす、或は適宜

に、鷄卵、若くは肉汁を加ふれば、最も良也、又乳粥と稱して、尋常の米粥に、牛乳を加へたるもの有、甚善良の食餌なり、又豆粥とて、鹽藏牛肉、若くは鹽藏豚肉二百匁を、細かに刻みて、之に淨水二升を加へ、煮て、次に豌豆或は白蠶豆二合五勺を入れ、胡蘿蔔少しを加へ、二三時煮熟して、製するもの有、是亦善良の食餌にして、歐米の人多く賞用す、

四 肉汁は、牛肉、犢肉、又は鷄肉二百匁を、一升六合の水に入れ、文水にて徐に煮る事、凡そ二時間斗、其間、液汁の表面に浮ぶ滓渣を時々除き去り、後靜定して、上澄の液を取るなり、若し急に製せんと欲せば、細剉したる肉に、適量の水を加へ、强火にかけて煮沸し、篩にて濾過して用ゐるべし、

五 鷄卵は、健康人にありては、生熟共に消化に大差なきも、病人に煮熟したる鷄卵を與ふるには、可成細やかに咀嚼せしめざれば、時々消化を妨ぐる事有、故に衰弱したる病者、若くは胃弱の病者には、半熟のものを最良とす、㊟鷄卵を沸湯中に投じ、大小に應じて、三四分時間にして取出せば、適度の半熟と爲るなり、

六 牛乳は、最も病者に貴重なる食餌也、其性質、善惡、及用法等は、嘗て本誌家內

衛生食物の條下に述べ置たれバ、就て看玉ふべし、

七肉類は、消化し易きものを撰用すべし、煮、又は炙りて用ゐるべし、共に強火にて急に煮炙するを良とす、緩漫に煮炙する時は、硬くなりて消化し難し、生肉は用ゐぬを良とす、宜く醫士の差圖を受くべし、

八香料、醋、酒、茶、其外總ての嗜好物は、病症に從て利害あるものなれバ、決して濫りに與ふべからず、皆醫士の差圖を受くべし、

九水は、病者に最も貴要の品とす、渇く時は必ず適宜に之を與ふべし、特に熱病者、其外發熱する患者には、頻々水其他の飲料(例之ばリモナーデ等、)を與ふるを必要とす、就中、腸窒扶私患者の如きは、假令病者、渇を訴へざるも、通例、一時間に三四回宛、注意して少許の冷水を與ふるを法とす、此事甚肝要なり、

十水を與ふるには、適宜に病者を抱き起して、半臥の位置と爲し、匙にて水を掬ひ、徐に口内に送るべし、若し病者頭を擡る事能はざる時は、長嘴ある盃を用ゐ、或は硝子管、又は麥稈を用ゐて吸飲せしむべし、決して、一度に多量を飲すべからず、少許宛頻々飲ましむべし、

十一 重症患者にして、自ら飲食し能はざるものは、總て扶助を要す、看護者、先左腕を患者の背下に送りて、徐に擡げ起し、患者の頭首を自己の肩若くは胸にて支へ、(或は枕と共に起して、臥床の後欄と枕との間に物を置きて、患者を半臥の位置と爲さしむるも可なり、)患者の胸前より褥上に亘りて、大なる布片を被ひ、右手に食物を取り、適宜に冷して、少許づゝ、徐に患者の口内に送るべし、分量多きに過るか、若くは取扱ひ粗暴なるか、又は熱き物を與ふる時は、患者噎塞、若くは氣道に入りて、危險を與すの恐あり、

十二 總て重症患者に飲食物を與ふるには、其前に、体の位置を適宜にして、先口内を能く清嗽して後、唇及舌を清水にて濕すべし、此くする時は、食機大に進むるもの也、食後も亦、清水を與へて含嗽せしめ、口内に遺りたる食物を除き去り、徐に褥上に安臥せしむべし、

十三 食時の時刻來るとも、患者就眠せる時は、濫りに食事の爲に喚起すべからず、

料理法(十三)

待月葊

楊梅酒の法

一楊梅一粒づゝ押つぶし、布にてこし、汁を溜、炭火にて一沫せんじ冷し、焼酎三分一加へ、砂糖を入、是また一沫せんじ冷て、右の酒に交、器に入、二三日置、滯をとり、壺に入置く、二三年は持なり、尤滯り有てはいたみ申候、

醴の方

一餅白米一升、ざつと挽割、蒸てさまし、糀一升、粳白米上の糀あり、水一升に酒三分一加へ、又酒五合、水五合合せてもよし、此中に糀ひた〳〵に入、一夜置、翌日つよくもみ候へそ、よく花おち候時、麹をこし捨、其中に右のこわ飯を仕込、寒中造り尤よし、鍋にてよくわかし、壺に入置、飲用の時、水にてのべ、加減はころ次第なり、何時造りても、常の醴より比、あぢもよく持もよし、

鳩酒の法

一眞鳩の皮をむき、鷲くはずといふ骨を去り、外は骨共細かにたゝき、摺鉢にて能すり、鳩壹羽は蜀椒、味噌大梅干ほど入、酒すこし入、すり交、さつと煮立候事、

煎酒の方

一酒三升、醤油五合、鰹一本細く削り、ざつと洗ひ、右三品よく交合せ、炭火にてわかし、酒の氣去り候までいり、梅干廿ほど入、鰹はこして取あり、

精進いり酒の法

一酒一升、但あまき酒よし、昆布二枚細く割、干瓢ほそく割、梅干廿、水一升入、よく交、炭火にて、そろ〳〵わかし、一升位になるまで焚詰、塩見合に入べし、

早いりざけ

一酒四合、醤油一合、酢五勺、炭火にて一沫せんと、器に入かき廻し、人肌に冷たる時、また火にかけ焚、右の如く三度すれバ、酒に成申なり、

茄子酒の方

一酒一升、醤油一合、粕漬茄子二つ、立に二歩程づゝに切、ざつと洗ひ、右交合、七合位にせんと候事、

酒の酔醒る方

一大なる水梨子、皮を取すりおろし、水をしぼりため、粕をよく乾かし、右の汁に漬、また干、毎日斯の如く、梨の溜水盡るまでいたし、よくほし、粉にして置、水

にて振て呑ば、忽酔のさめる事妙なり、

山河酒の方

一白米一斗能むし、白麹八舛、水八舛よくかき交、わきたる時壺に入、あわ出る、泡細くなりたる時、わき上り鎮りし時、上白米一斗蒸、麹八舛、水八舛また入べし、夏季は三日位にてよし、

醴久しく持方

一餅米一舛引割、尤粉になりたる分は、ふるひ落し、和らかに蒸、よくさまし、麹二舛、水二舛、麹は水にひたし、よくもみ、かすを捨、とはしにてこし、右の飯を入、能かき交置、甘酒出來候後、をけの廻りに沫立候其時、炭火にて煮、白沫立時、備前徳利に入、ひやし置、よく冷たるを取上置、但日數立ば、からみ出可申、其時ば又炭火にて煮候事、

學園

女子書牘文論（承前）

目黒和三郎

○作例のつゞき

螢を贈る文

見舞の文などに、物を贈呈することをかけど、それは、物を贈る方は主に非ずして客なるを、唯何々を贈る文などいへるは、直に物を贈るが主になるなり、而してこの物を贈るは、上中下におし亘してする事故、正略の式は、その場合によりて、注意しかくべきことなり、されどおしなべては、略式の方を用うる場合多かり、略式の方は、却りて書くにも容易く、將略式の作例は前に多く擧げたる故、こゝには正式の作例を示すべし、

拙き筆の跡もかしこけれど、一言聞えあげまつり候、あら金の土もさくといふこの頃のあつさ、皆々様、いかに過ぐさせ給ふにか、昨宵わらはべどもにいざなはれて、納涼がてら、江戸川のほとりにものし侍りしよ、はからずもいと多くの螢、かり得申し候、御子たちの御心慰にもと、六ッ七ッ御

前に御覽ぜさせ侍るを、聲なき虫をと、御しりぞけ遊ばせられず候へば、こよなきことゝ御座候、　穴かしこ

虫の音を聞く文

こは虫の音聞かんと、野邊などに誘ふ文なり、誘引の文は、前にも作例あり、こゝには略式を擧ぐ、

はしりがきして、一筆申し上候、けふは夕月夜にて侍れば、野邊の步行もたど〳〵しからじと、思ひおこし候、草村どもにすだく虫の音の、んづれうとましきはなきを、松虫鈴虫は、とりわけあはれにや聞ゆらん、きりぎりす、はたおりはた惡くからぬ音にや鳴くらん、御さはりも無之候はゞ、たそがれ頃より、御やかたおどろかし侍らんを、御心して待ち給へかし、

あら〳〵かしこ

歳暮の文

一年の無事に經過せし見舞祝儀の文なり、さてこの歳暮の文は、時節柄とて、春のいとなみなどに、いそがはしき事を書き入るゝが例なれど、いづれもその心得して書くべし、又正略何れを用ゐむかといはゞ、場合によりては、略式も苦しからねど、大方は正式を用ふべきか、そは前にもいへる如く、見舞祝儀の文ゆゑ、禮を盡くすべき理なればなり、

一筆のはしりがきは、年のいそぎと御ゆるし可被下候、今年ははや明日一日の程と相なり、矢の如しといへることも、今更おもひあたり申候、日頃御出入多き御舘には、春の營よ、さだめて御用多の事と存じまつり候、さて年の市にて求め侍りし粗品には候へ共、串鮑一籠、歳暮御祝の印までに、御覽に入れまゐらせ候、御祝の調理にあはせ給はらば、いかばかりかうれしからまし、　　穴かしこ

女服考（第十二稿）

有住齋

一上古は男女とも、襖子と云ふ服をきたりし也、其製は後世の直垂の如くにして、胸紐もあり、腋をも縫ひふさぎたるものなるべし、其證は古代の石像にみえたる形をみても、然おもれると、筆の御靈に論じたり、いかさま胸紐を付て、腋をも縫ひふさぎしを、今の小袖の如く、服用したるにやあらん、中世漢衣わたりて、其製一變し、後世直垂と云ふものにはなり來りしならん、然れバ素襖と云ふものも、此襖子にくらぶれむ、かざりあきよりして稱せしなるべし、女の服したる證は、今昔物語（十六ノ廿一語）、女の沼水に入りて、遁行けるを、翁と嫗とがあはれみて、其家にて助け扱ふ様を云ひて、嫗慈悲有りける者にて、此を哀むで、賤が襖と云ふ物着せて、奥の方に居て云々、又（卅一ノ五語）好き衣、惡き衣の事を云ふ條に、妻は紬の襖と云ふ物を着たりけるを、色〻に縫重ねたる衣を着てぞ、娘の方には行きける」砂石集に、和泉式部云々、時雨しければ、せん方なくて、田かりける童の、あをと云ふ物をかりて、打ちかつぎて參りけり、

右は賤者のきる、麁き襖なるべし、

和名類聚抄に、襴衫と、襖子と、並べ擧げたり、今世小袖着る所に、着る表衣なり也、好によりて、よき絹にても作り、美しくもしたりしにて、古の常の衣なり、襖子と書くは襖衣にて、子の意にはあらず、直衣の衣の如し、又綿衣とも云ふ名あり、襖に綿を入れたるなり、

今昔物語十六ノ十五語若男の云、狩衣にまれ、袴にもまれ、替んと、蛇持の云、其二は不可替と、若男の云、然らむ此着たる綿衣に替よ、とあるは裏に着たる襖を云ふなり、

空穗物語下國譲、中納言は、赤色の織物の襖、にび色のさしぬき、（今の小袖の如く着たるなり）又云、布の襖、綿あつく入れて、いと多う持せ云々、又御裝束どもは、白き襖綿入れて、銀の泥して繪かきたり云々、御ともの人は、うす色のあを、露草して遠山を摺、綿みな入れたり、

一後世の被衣と云ふものは、昔きぬかつぎと云ひしなるべし、是は女の顏をかくす具なり、又口おほひと云ふ事もみえたり、似たる事ながら、たがへれど女のたしなみは、同じかるべし、

源氏物語末摘花、口おほひのそばめより、猶かの末つむはな、いとにほひやかに、さし出でたり、

長門本平家物語一十、老僧の云々、から色の扇にて、口おほひして、わし鼻なる、これもちをつく〴〵とみて、へし口して云ひけるは、

今昔物語廿三ノ廿四語、女房は薄綿の衣一ッ斗りを着て、片手しては口おほひをし云々、

盛衰記八女の化れる天狗の狀を云ひて、頭にかつらかけて、紅粉白粉の樣なる物を、頰に付けたり、大眉作り、かね黑なるものもあり、紅の袴に薄衣かつぎて、大空に飛ぶもあり、

砂石集五下、連歌に、「富士の山雲のはかまをきたるかな雪の帷打ちかつぎつゝ」雲井の御法、はらまきして、刀あまたさして、きぬかつぎのやうに、小袖をうへにかつぎて、

衣かつぎの日記、事よくありぬとて、きぬかつぎなど、おどろ〳〵しくひしめく、是ハつまりの御遊の日、ものの見に集りたる、女房の衣かつぎたる也、

大上臈御名事に、女房はかつぎはなくして、白かたびらきるべからず、其上本式は

かつぎもぬり也、袖は左を上に重ぬるなり、きぬかぶりしたるを、うちぬぎ、頭をかた
宇治拾遺五、賀能知院と云ふ僧云々、（是よツ・を濁り　き゜を清めり）
ぶけて、すこしくうやまひ、をがみつゝゆく、」
代始和抄、卯の日は新嘗、蓬萊山をうたふとい
へり、貫首の人（藏人頭也）紐をとき、乱舞の事あり、き
ぬかつぎといひて、女房など見物せし事あれども、
昔はありけるにや、
玉露叢、御即位記に、其外月卿雲客、簀子に徘
徊して、拜し奉る、又衣被の女房、殿中に集り
つどひて、我さきに下拜し奉る、
女中常服略記、かつぎ、白練綷、ひとへ、略は袷に
もする也、寶盡しを銀ぱくにて摺、（是は婚禮の時也）又云、被、上下ともに同じものなれ
ども、寛永の頃より、子細有りて、關東にては用ゐず、只婚姻のみ用ゐる也、常
に用うるかつぎ、染様習あれども、略して不記、京都にてはかつぎと云ふ、



齊按、此物は途中覆面の具にして、式法あるものならず、染様習あるなど云ふは、いぶかしき事なり、此衣被きたる体は、本誌第廿三號、比禮の條に、袋法師畫詞の圖、千早掛帶の下にきたる、被衣の女婢女と下女の圖あり、今省く、三人出だせり、參照すべし、

又云、蜘蛛退治畫詞にもみえたれば、左に擧ぐ、」尾州熱田社、再興の繪卷物所載 享祿二年の奥書あり 主人の躰今云ふかつぎていのものを着る、かうべに着たるは、ひとへなるきぬと見えたり、市女笠をかぶりたり、



漫錄

古今集傳授一班（つゞき）

森　馬太

基俊、一たび古今集の疑義を俊成に傳へてより、俊成はその子定家に、定家はその子爲家に授けなど、和哥を以て世業とせし一族の専有物となりて、爲代絶ゆることとなかりき。されど、その初を思へば、

究勝、秘說として傳へんとの構事にはあらざりしなるべし。當時基俊は俊頼とならび立ち、兩虎の勢を以て、畏敬せられしかど、その吟詠は遙に俊頼の下にあり、哥人といはんより、むしろ、哥學者を以てみづからも許しゝなりけり。元永年中の哥合に、俊頼と共に哥を判せしにも、故例をひきて滔々と論じ、その語氣稍罵詈に傾きしほどなり。また、永成法師の哥は禁忌に觸れたるにも拘はらず、金葉集中に入れられたるは、以ての外の沙汰なり。集を撰ぶべきほどの人、心得つべき難を見とがめずして、入れ侍ること、甚しき過なりなどやうに、悦目抄に記せり。そのほかに哥合及び哥會の席に於ては、口を極めて俊頼をいひ落し、乳臭きものゝやうに思ひあなどりしは、朝野人士が、識見卓絶なりとして、其後崇拜の熱度を高め、門人として束修の禮を執るもの、おのづから多かりしならん。すでに師弟の交をなすに於ては、和哥に關する一切の事件を授受するに至りしこそ、亦明かなりとす。この故に、古今集中の哥につきて、不審を正さんがために、その說を受けしものは、俊成一人に限らざりしなり。基俊が家集に、わづらふことを侍りしころ、あひ知りて侍る女のもとより、とぶらはく、右近の馬場のひをりの日とは何事ぞと問ひて侍りし返事に、いづくをか君たづねまし道芝におくしら露の消えなましかば、とよみて遣はされしが見ゆ。されど、衆凡は一俊に及ばざりしかど、基俊の家學、遂にこの人によりて傳はりしものなり。

鎌倉幕府の政衰へ、應仁年中に至りては、天下麻の如く亂れ、人心恟々、一日も安堵せず、專武事にのみ忙はしかりしかバ、和哥を詠みて風月を樂しむこともならず、哥道斷絶の界にまで陷りしを、東常縁の力にて、わづかにその命脈をつなぐことを得たり、常縁の先は、千葉介常胤の六男東六郎太夫胤頼といひ、下總國東莊三十三鄕を領せしものなり、常縁に至りて、室町將軍の近臣に用ゐられしが、弓馬の術は言ふも更なり、優にやさしき敷島の道にも分け入りて、二條家の家學に通じ、古今傳授を堯孝法師より得しが、時しも應仁の亂によりて、都の中も限なく騷ぎしまぎれに、哥道愈衰へ果てゝ、その說を傳ふるもの無かりしかバ、この人を都に召し寄せて、再和哥を興すことゝはなりしなり。東素山消息に、

初當東山殿御代、公武之哥道、斷絶之處、依勅定、東下野守平常縁朝臣上洛、關白殿、近衛内大臣殿、二條右大將義尙、常徳院殿常縁被成師範、天下之哥道、再興之事、日本國無其隱候、是東家之爲規摸也、云々

七月廿六日　壽昌院素山判

遠藤大隅守殿

とあるにて當時を思ひやるべし。この時にわたりて、連哥大に世にもてはやされしが、有名なる連哥師宗祇法師は、哥道にも頗熱心なりしかバ、常縁の門を叩きて、勤勉怠らず、古今の秘說をさへ學び取りぬ。終焉記に、東野州に、古今集の傳授聞書、並に切紙等殘るところなく、此たび今世

のをりに、菜縄口径什厨ありしてとなるべし云々とあり。

（つゞく）

女誡利解（承前）

内藤燦聚寄送

婦行第四

婦行とは、行は心に主とする所の事に見はるゝをいふ、婦たる者の常々行ふべき事を、専ら誡むる故に、章の名とするなり、」

女に四行あり、一に曰く婦德、二に曰く婦言、三に曰く婦容、四に曰く婦功、この四行は、周禮の家宰職といふ文にあり、下の段に、悉く其義を解さとす、」

夫れ婦德といふは、必しも才明絶異なるにもあらざるなり、婦言といふは、必しも辨口利辭なるにもあらざるなり、婦容といふは、必しも顏色美麗なるにもあらざるなり、婦功といふは、必しも功巧の人に過たるにもあらざるなり、

婦德といふは、必しも才明絶異なるにもあらざるなり、とは、德は得なり、己に得る所の善心をいふ、必しもとは、これにかぎるといふ心なり、才は才智にて、智慧あるなり、明はあきらかなり、絶はすぐれたるなり、異とはことなるなり、格別人にすぐれて異るほどの、智慧はたらきあるをのみ、いふにあらず、となり、」婦言といふは、必しも辨口利辭なるにもあらざるなり、とは、婦言は婦人の言葉なり、辨口は、言葉のさわやかにかしこく、辨舌よきなり、利辭

も辭とくして、利口の事なり、婦人の言葉は、辨舌よく利口なるのみにもあらざる、となり、」婦容といふは、必しも顔色美麗なるにもあらざるなり、とは、容は品かたち、顔色美麗は、かほかたちうつくしきなり、かんぜせの美のみを、婦人の容とするのみにもあらざる、となり、」婦功といふは、必しも功巧の人にすぎたるのみにもあらざるなり、とは、婦功とは、婦人の務とする業の事なり、功巧とは其の業を巧になすとなり、過たるとは、人にまさりてゆるをいふ、婦人の功とするは、其の業のたくみなることと、人に勝れたるのみを、いふにもあらざる、となり、」下の條に、四行の四行たる事をさとすが故に、こゝにまづ四行の、才明、利辭、顔色、功巧、によらざる事を、ときしめすなり、」

清閑貞靜にして、節を守りて整齊、己を行ふこと恥ありて、動靜法あり、是を婦徳と謂ふなり、」

清閑貞靜にして、節を守りて整齊、とは、清閑はきよくみやびやかなり、貞靜は正しくしづかなり、整齊はとゝのひとしきにて、たりひづみなくそろふとなり、」己を行ふこと恥ありて、動靜法あり、とは、己は吾身をさす、行ふとは今日のなすことなり、恥ありとは、恥ることあるが如く、人に下り愼むをいふ、動靜は、立居ふるまひとりまはしなり、法はのりなり、法式にかなふをいふ、」是を婦徳といふなりとは、前にいふ智慧才覺人に勝れてかしこくとも、此の清閑貞靜にして、其節を守る等の事に背けそ、

婦人の徳とはいひがたし、こゝに述る所の如きを、婦人の婦人たる徳、と謂ふべしとなり、」
辞を擇みて說き、惡語を道はず、時ありて然して後にいひ、人に厭はれず、是を婦言と謂ふなり、
辞を擇みて說き、惡語を道はず、とは、辞はものいふことを、擇ぶとはあしきをすて、よきをえらびとるなり、說はのぶるなり、惡語はあしき物語なり、道は言と同じ、是れあしくつたなきもの語を、みだりにのべざるをいふなり、」時ありて然して後にいひ、人に厭はれず、とは、厭はいみきらはるゝをいふなり、人のうはさなどをいひ、又は人をあしさまにいひのゝしり、人人の心にさはる事をもいひいだし、且わが非を飾り、人のいふこともきゝいれず、吾いふことをのみ、事騒しくものいへど、人々にもいみきらはるゝなり、言葉いやしからず、しとやかに、物語すれバ、人にいみいとはるゝこともなきを、婦人の言葉とはいふ、となり、」
塵穢を盥浣して、服飾鮮絜、沐浴時を以てして、身垢辱せず、是を婦容といふなり、
塵穢はちりけがれ、盥浣はあらひそゝぐなり、服は衣服、飾は衣服の飾、鮮はあざやか、絜はいさぎよきなり、ちりつきけがれたるをあらひそそぎ、衣服をいさぎよく清らかにするなり、」沐は髮をあらふなり、浴は湯をつかふなり、」垢辱はあかつきけがるゝなり、髮洗ふべき時は髮あらひ、湯つかふべき時は湯をつかへど、身けがれあかつかずと、いふとなり、」あまりはでやか

によそほひ飾り、或は時々の風俗にうつり、衣服など美麗を盡し、又はいやしきなりかたちをあしかざるは、淫を導くの基にて、婦容とはいはざるなり、こゝに誡むる如きを、女子のたしなみ容つくるとは謂ふ、となり、」

心を紡績に專にし、戯笑を好まず、酒食を絜齋にして、以て賓客に奉ず、是を婦功と謂ふなり、

心を紡績に專にす、とは、前にいふ如く、紡績は絲苧をつむぐことにて、織縫の事に通じていふ、專はそのことに心をゆだぬるなり、」戯笑はたはむれわらふなり、織縫の事に心をゆだねて、ものくるはしく、たはれ笑ふ事を、すきこのまざるなり、酒食を絜齋にして、とは、飲食ものをいさぎよく、きれいにするなり、賓客に奉ず、とは、賓客はまろうどなり、奉ずるはさゝぐるにて、もてなすことなり、」こゝに述る如きを、女子の務しわざとすと、いふことなり、」

此の四のものは、女人の大德にして、乏しうすべからざるものなり、然して是を爲すこと甚だ易し、唯心を存するにあるのみ、古人言ることあり、仁遠からん哉、我仁を欲すれば、しかも仁斯に至矣、とは此の謂なり、

此の四のものとは、此章にいふ所の、婦德、婦言、婦容、婦功、のよつをいふなり、」女人の大德にして、乏しうすべからざるものなり、とは德の解は前にのぶ、乏しうはことたらざるなり、此の四のものは、女子の守るべき、最も大なる德の行にて、ともしうすべからず、なくてかな

はぬものなり、といふとあり、」然しては、しかもの心なり、是を爲すこと甚だ易し、とは、此の四のものを、行ひなすこと、至て易し、といふことなり、唯他念なく、四のものを行はんと心かくれバ、たやすく成し得るとなり、耳は、かぎる言葉なり、」古人いへる事あり、とは、前にいふ、爲し易きことをおかさんが爲に、證據に、古聖人のいひ置れし言葉を擧るなり、」仁遠らん哉、我仁を欲すれバ、しろも仁斯に至る、とは、論語述而の篇に、孔子ののたまひし語なり、仁も德なり、外に在て遠く離れたるものにあらず、近く吾に有るものなれバ、遠くにあらんや、これ近し、といふ心なり、斯はそのあたりなり、至とは、きたるの如し、我仁道を行はんと欲すれど、其仁そのあたりに來り至るとなり、」此謂なり、とは、この四のものを行ひ得ると、かたきにあらず、唯々心に願ひ求むれバ、四德のそのあたり來り至ること、此語の如し、とさとし教ふるなり、」

（婦行章了）

藻塩草（つゞき）

楢の舍主人

總じて、外の男のうはさ、ゆめ〳〵、よしあしいふべからず。夫にかくして文書くべからず。もし文などかく時、夫の入り來るに、ふりあしくとりかくすこと大にあしゝ。反古なんど見るにも、おなじこゝろもちなり。かやうのすぢより、うたがひをうくること、世におほし。

よその男の、女房あたりよき、こゝろもちよきやうはさなど、かりにも無用なり。わが男のみゝにてすりになるものなり。夫の一坐、男客に目見あはせ、かくしわらひなど、いさゝかもあるべからず。女は色のみちばかり、うとき人といはれて口をしからず。心あさく、ものいひやすけれど、人もおもはぬことをいひかくるならひなれば、いかに心やすきたのもしき人とても、老若にかぎらず、男女は別あるものとおもひきはめて、わが夫のほかに、つゆばかりも心をにごさず、青天白日にもはぢざらぬこそよからめ。ものやるにも、しなあるべし。文は、大かたとのたちへは、他筆然るべし。ましてや、歌かきてなどは、おもひもよるべからず。たとへ女同士にても、みだりにたはれたる文体、とりかはしすべからず。和歌の文にて、月花につけ、いひかはすべき女中はかくべつながら、相手によりて、用捨あるべきことなり。そのほか、慎むべきしなは數々あるべし。まめやかに心をつけ、そのひとりをつゝしみ、われと心にとひて恥ぢざるべし。うたがはれざる用心、かへすがへす肝要なり。

一、しつとは、女にある筈の病にて、つゝしむべき第一なり。世人おほかた粋らしく、通りものゝ顔にて、りんきせぬ風をみせかけ、色しあかへてりんきをいたし、はげしきは、わが夫はおろか、よその妹背までとりくはへ、見ず知らぬ人のうへまでもきゝ出してあつかふ。子にも大かたりんきにてよめをにくみ、奉公人はほうばいにりんきし

て、主人へかけ言さゝへ事、おほかたこのたぐひにて、人をそこなひ、身をもそこなふなり。しつとは三毒の中にも、とりわけつみふかきことにて、誰もたしなむべしと、思はぬにはあらねど、女の性はみなひがめり。妬毒のなき人はなし。生得のおろかなる人には、まれにふしつににたるもあれど、はつめいとみゆる人に、りんきのなきは見えず。生質不嫉なる女性は、まことにありがたきためしあり。まづ、しつとは、女にある筈のものとしるべし。いかほど、ものゝ道理をわきまへて、りんきはせぬ筈とがてんしながらも、その時にのぞみては、心おだやかならず。ことさら、夫われにうちあけて、そのわけをつゝまざるは、當坐の義理につゝまれて、おのづから、うつくしくもあしらへども、われにかくし、またはわれをだまし、手あしく出しぬき、またはさきの女の心あしくて、われをあなどり、夫のこゝろうつりかはるにつけて、しな數あることとなれば、そのきはにいたりては、何ともかんにんしがたきこと多く、心ももやつき、むねも安からぬところへ、めしつかひ、又は出入りの女などのもとより、おのが心にもてる、りんきのさしくべにて、われに道理をつけて、夫をそしり、妾のかげ言、わがしらぬあらましなどもいひまかせて、よくもかんにんあそばすなどゝ、たきつけらるれば、つゝしみふかき人も、つひにしのびかねて、いろにあらはれ、かほもとあしくなり夫にいぶりのいづるもとゝなるなり。（つゞく）

村田春海 歌がたり（承前）

松野操雄

歌のさまは、いとひろし。これをひとかたにおもひなづむ人は、みなたがへり。いにしへ今のけぢめを、よくおもひさだめおきて、おのがこのめるかたにつきて、おのがすがたをたてゝ詠むべきものなり。かならず、いにしへにもなづまず、また後の世にもおちず、我とわがえたるふしを詠みいでむこそ、まことのうたなれ。これをかたくなにこゝろえたるは、いにしへぶりならば、かならず、いにしへになきことばをばいはじとかまへ、また後のすがたならんには、かならず、いにしへめきたる事はまねばじとおもふひとあり。ひとわたりおもへば、たゞしき事のやうなれど、そは、ひとのことばづかひをしひてまなび、いつはりて、にせものつくるたぐひなり。歌は、こゝろのまことをのぶるものなれば、かならず、おのが物ならむやうにこそ、あらまほしけれ。さて、おのがこゝろにまかすとも、一首のとゝのへと、詞のならびとは、ふかくつゝしむべきわざなり。こをおろそかになす時は、いたく、ことざまに成りぬべし。たゞ、よくいひとゝのへたらんには、古とのちとの言葉を、まじへてもなすべく、いにしへになきたくみを、いにしへのことばをもてあやなし、また、後の世のことばをかりて、ふるきすがたにもとりなすべし。また題により、ことによりて、またく、いにしへぶりならでは、かなはぬあり。また、またく、後の世のすがたならでは、いひがたかるふ

しも有るべし。ろのいにしへぶりをなすにも、古をまなぶべきと、まなぶべからぬとのわかちをなし、また、後の世のさまにならふにも、後の世のとるべきと、とるべからぬとを、こゝろえてなすべし。さて、いにしへにも後にも、詞をよくえらびて、しらべを、よくとゝのふべきものなり。歌は、しらべこそもとなれ。いかに、こまやかにいひいでたりとも、しらべくだけたらむは、いやしげなるべし。また、よくいにしへににたりとも、しらべあしからむは、めづべきことかは。このしらべのよしあしは、たやすくしりやすきが如くにして、いとわきまへがたきものなり。しらべのとゝのひたるまことのさまを、よくしらむと思はゞ、古今集を、よくあぢはふべし。古今集は、しらべをむねと、えらべるものなり。古今集に、ふかゝなれて、そのあぢはひをこゝろ得てのち、あだし集どもをみば、そのけぢめ、明らかにしらるべし。三代集といへど、おなじさまのものなりと、大かたの人は思ふめれど、後撰、拾遺のふたつは、しらべわろき歌もまじりて、古今とおなじなみに、いふべき事ならず。また、萬葉集は、もと、えらべるものならねど、わろき歌なむ、おほかめる。それが中に、すぐれたるうたにいたりては、しらべ高きこと、にるものなし。萬葉のうたは大かたは、本のすがたはよくて、末のしらべ、くだけたるうたおほし。萬葉集をまなばむには、よく、このわかちをなしてみるべきなり。今の世の、いにしへこのめる人の、萬葉ぶりなりとて、よむを

みるに、ことばとしらべのえらびをむなさで、ただ、いにしへの、わろきうたのさまあるうたをつくりいでゝ、われ、いにしへぶりのうた詠みねたりあれど、ほこりがにいひのゝしるは、かたはらいたきわざなり。つたなく、いにしへをうつさむ事は、もと、かたきわざにはあらざるなり。さて、萬葉のすぐれたるうたは、歌の、いたりて妙なるきはみなり。いかでか、今の世のひとの、たやすく、まなびうべき。かにかくに、今の世にては、古今集をこそ、むねとまなびつべき事なれ。古今集のあぢはひを、よくしらでは、萬葉のすぐれたるうたをも、見分くまじきわざになむ。かれ、はじめに、まづ古今集を、よくまなびて、さて、いにしへにものぼり、はた、後の世をも、かよはして見るべきなり。さて、後撰、拾遺のふたつは、ならび、くはしからねど、古今につゞきて、のりとなすべきことは、さらに論なし。それよりくだりて、後拾遺、金葉、詞花の頃にいたりても、猶いにしへの、をかしきふし、殘りたる所もありて、本として、ならひつべきうたもおほし。新古今の頃にいたりて、うたのさま、いたく、ことになりにたり。此ころは、世にすぐれたる上手、おほかりければ、ひとふし、その世の手ぶり、出でこしなり。すべての事、上手出でゝ、その體變じ、さて、それより、おとろふるものなり。それは、なにのみちも、しかり。こゝによく、心をつくべし。されど、また、その人々のよめるが中には、いとすぐれて、古のよき歌に、ならべつべきものあり。さるを、今の世の、新古今のすがたこのめるひとは、そのころのひとの、すぐれたる歌ある事をも、

おもひもわかで、たゞ、ろの世に、ひとふし、よみ出でたる手ぶりをのみ、おもしろきことにおもへるは、たがへり。ろは、上手の、こまやかに、とりつくろひたるものあれば、ひとわたりうちみて、ねもいはず、をかしきが如くなれど、いにしへのうたよりみれど、こゝろのまことを、すくなくして、ことば、えむなるにすぎて、いやしげなり。新古今をよまむには、むねと、このけぢめをおもふべし。さて、ひろく萬葉集より、八代集を、とはしみて、そのとるべきをとり、ならふべきをならひて、しらべは、かならず、古今集のすがたを本となして、おのがひとつのすがたを、なしいでむやうに、あらまほしきものなり。いにしへうたの、高きさまをのみまなむむは、ことくはふべき事なきが如くなれど、かく、末の世にては、しかのみおもひたらむも、かへりて、なづめるわざなり。そは、こゝろをのぶるわざなれば、世にしたがひ、ひとによりて、おもむき、ひとしかるまじきことわりなれどなり。今は題詠のうたのみ、ひと〴〵、むねとよむめれど、世にしたがひて、そをなさでも、得あられぬわざなれど、おのづから、後の世のさまをも、まなばではかなはず。これに、心得あることなり。まづ、おのづから、こゝろよりよみ出づるうたを、まことのうたとおもひさだめおきて、さて、題詠は、うたのまことのさまならぬことを、心にわすれずしてなさば、むげに、後の世の、いやしげなるさまをば、まぬかるべし。題詠にも、いにしへのさまと、後のさまあり。いにしへのは、

かならずしも、題になづまず。そは、つたなくて、題をくまなく、よみかなへざるにはあらず、そのいひのこしたるに、かへりて、ふかきあぢはひはあり。ろは、猶、おのづからあるまことのうたのこころを、うしなはざればなり。後の題詠は、いたく、題になづみて、たゞ、むげに、いつはれるふしのみおほし。そは、こゝろのまことはうせて、たくみをのみ、もとむればなり。いま、題詠をなさむに、大どかにして、題のこゝろを、たどらざらむは、くち惜しきわざなるべく、またあまりに、題にのみこゝろひかれて、ひたすらに、くしたらむも、いとはしかるべし。こは、うたびとの、こゝろをつくべきわざぞかし。（つゞく）

手鞠歌（三）　あ、ま

源成勝　作

一つとや。人と生れし嬉しさを〳〵
　わだにはなさじ嬉しさを〳〵
二つとや。二人の親と君がよの〳〵
　恵はわすれじいつまでも〳〵
三つとや。身をつみ見ればよくしらる〳〵
　人のいたさもよくしらる〳〵
四つとや。よしや人こそあしからめ〳〵
　我より人をあしくすな〳〵
五つとや。いつもかはらずにこやかに〳〵
　親の心をなぐさめよ〳〵
六つとや。むかしがたりもよく聞けぞ〳〵
　今のかゞみとなるものぞ〳〵

七つとや。何につけても人のため〱
よかれと思へバ我がよし〱
八つとや。山のおくにも花はさく〱
人はてねども花はさく〱

九つとや。心のみにくき人ならむ〱
姿も粧もなにかせむ〱
十とや。となりかくなり父母の〱
心にまかせて世をむへむ

畫師の妻

江見水蔭

其三

あッ御父様だ、御父様の御聲だ、ト眞底から喜びて娘は飛上りぬ。母親も今までの胸の痛さを忘れて立上り。文ちやん、嬉しいかえト言ひつゝ手洋燈持ちて出迎へにゆきぬ。既に早や娘は板の間に坐りて兩手をつき。御父様、お歸りあそばせ！ト辭儀をなしぬ。

今此二人に迎へられたる此家の主人は、年の頃三十一二。如何にも美術家たるの相をあらはしぬ。妻を見て、娘を見て、莞爾〱と笑ひながら、歸ッたよ、歸ッたよ、

驚いたらう、今頃歸ッたのを、吃度驚くだらうと思ひながら歸ッたのだ、ト言ふ。」
妻は甲斐々々しく下に降りて、盥を洗下より運び。　まア貴郎、此所へ御掛けあそばせ、ろして草鞋を……ト言へど、それには氣も着かぬか。娘の方を見詰めて、
　文公、眠いだらう、未だ寐ずに居たのかね、能く眼がかたいなア、御父様が今好い物見せてあげるよ、それは實に面白い物だぜ。　なんです、御父様、それなんです……御土産?　まづ御土産さ。　さう、早く見せて頂戴な、ト、今漸く上口に腰掛けたる父の肩に縋りて娘は言ふ。此内妻は土瓶の微温湯を盥に注ぎ。良人の草鞋の紐を解去り。古足袋を脱がしむれど、それも氣の着かぬか早や娘との話に浮かされて、其儘上へあがらむとす。　あれ、貴郎、此通り御洗足が取ッてありますのに。　うむ、足か、足は綺麗だ、そんなに汚れては居やアしない、ト脚半も解かずにづか〳〵と上りぬ。斯くて虚呂々々と四邊見廻はし、石版畫に目を付けて。
　なんだ、お光、お前内職仕て居るのかい、ト言ふ。　はい……貴郎……内職を……ト言ひかけて妻は良人の顔をつく〴〵と見ぬ。　も……なんだ、内職なんざア仕なくッてもいゝじやアないか、お止、お止、ト勇立ちたる言葉、妻は良人





の威勢好きに呑まれて蚤く胸の痛みをや忘れけむ。扨て今までの苦勞をも忘れ、これまでの貧しさも忘れらるゝ事かと、安心もせられけむ。これも土間より上りぬ。」

矢張家がいゝなア、ト言ひつゝ火鉢の前に坐り。旅へ出てると旅がいゝが、家へ歸ると家がいゝ。出てから幾月立ッたかねえ、ト問ふ。彼此半歳で御座イますと、イーズルを仕舞ひかけたる妻は答ふ。……何、そんなになる物か、そんなに行ッてやア仕ない、ト首を振りぬ。娘は父の傍を離れず其膝の上に片手を載せ、片手の指を折りて、數へつゝ。六月と、半よ。さうか、それぢやア半歳の餘だ。そんなに出て居たかなア、ト初めて驚きぬ。貴郎の御留守に落合さんがお出なさいましたよ。あッさうか。それに水田さんが度々お尋ね被下いました。

あッさう…………。跡は未だ澤山にゐらしッやいましたが、申しますまい、あまり好い御話ではありませんから。あッさう…………ト言ッて頭を抱へ、何をか考へぬ。忽ち思出したる如く。文公々々、好い物を見せてやる、御覧々々ト繪の具函取出し、蓋を開けばパレットの下に見取畫きの景色四五枚。これ御覧、これは江の嶋の兒ケ淵だよ、其下が鎌倉の御宮——綺麗だらう、未だ其方の包みには

澤山にある。　御父樣、これが御土産、ト不平さうに娘は言ふ。　さうさ、それが御土産さ、ト一向に平氣なり。母親傍より。　貴郎、何か他に買ッて來ておやりなされば好いのに、どんなに御土産を樂しんで居ましたらう。さうだッけなア、ト今此時に合點しけり。

土産のなきこそ道理なれ、衣服さへ此寒きに夏着てゆきたる儘なりき。事にまぎれて妻は知らざりしが、あまりの事に肝潰れ、扨ては空だのみなりしかと俄に悲しくも亦痛くもなりぬ、愁は眉にあらはれぬ。待受の衣服さッぱりと洗張仕て縫直したるを取出し。　さア貴郎、御召物を御着かへなさいまし。　さうか、それは難有い、ト得々として立ちぬ。其薄く、其汚きを見て妻は泣きぬ。娘は母よ小聲にて問ふ。　妾の衣服にするのは、どれ………。

母は答へかねて咳入りぬ。妻が後にて如何に泣きしかを良人は知らず。只其待受の冬着を暖く着しぬ。かくて直ちに又包の中の見取書取出し、稚き娘を相手にして說明にふけりぬ。

貴郎………ト呼掛けたり、妻は。　なんだえ、　振向きぬ、良人は。　貴郎に

いろ〳〵御相談申したり又御話し申されねばならない事がありますが…………よ。　相談…………。　御草臥と存じまして今夜は申しませんが…………只一言伺はねばならない事が御坐イます。　なんだね…………。　今度は如何で御坐いました。　今度かい…………。　少しは好う御坐いましたか。　い丶や…………トさも言悪さうに答へぬ。斯くて頻りに頭を掻きつ丶、　お光、お光、途中で繪具が無くなッたもんだからね…………。

あきれて妻は顔を見守るのみ。　娘は繪具函の瓶を一々取上げて見て。　あッぞれも無いのよ。　貴郎、繪具が無くなるまで何を御畫きなさいました、ト涙を堪へたる震聲にて言ふ。　良人は氣毒さうある顔して、人だの景色だの寫生仕たのさ。　寫生して如何あさいました。　大方人に遣ッたよ。　それでは旅へ御出なさッた甲斐がありませんねえ。　なに、さうでもないよト言ひて極り惡氣に、レストスチックを弄びぬ。

文林

梅　近衛　忠煕

梅の花ときもおろきり咲きにけり
さくらさく迄ちらであらなむ

春鶯呼客　毛利　元德

うぐひすの宿になくだに嬉しきを
みやこ人にもとはれけるかな

岡梅　德大寺實則

春がすみにはふゆふ日の岡のへに
うすくれなゐの梅さきにけり

春鶯呼客　東久世通禧

さく梅のあるじはしらぬ宿ながら
鳴くうぐひすにひかれきに鳧

鍋島　直大

日にそへて聲もひまなく聞えけり

とふ人おほきやどのうぐひす　前田　利嗣

うぐひすのさへづる聲に花もなき
吾がやま里もひとのとひける　高崎　正風

春ごとにうぐひすきゝにくる人の
かずこそまされ岡のへのさと　前田　利鬯

おのづから主人がほにぞみゆる哉
來るひとさそふ宿のうぐひす　前田　利昭

梅もまだにほはぬ宿をうぐひすの
こゑにひかれて人ぞとひける　宮地　嚴夫

うぐひすのこゑをしるべに木隠の
春をいかにとひともとひけり
小出粲

鶯のおくなるこゑをあるじにて
知らぬ人にもとはれけるかな
植松有經

うぐひすは呼子鳥かもあさゆふに
鳴くこゑとめて人のとひくる
谷勤

しるしらぬひとをもわかず鶯は
梅さくやどにさそひきにけり
内藤存守

うぐひすのけさの初音に誘はれて
春かぜさむきのべにきにけり

鳴く聲にさそはれきつる君なれば
うぐひすこそはあるじ也けれ
阪正臣

雪中管絃

ふる雪のつもるにつれて聞ゆなる
糸たけのねのさえもゆくかな
黒田正臨

楠公のことをつくれる演劇を見て
岡田朝太郎

山ざくらさき匂ひけるあけぼのも
ちる夕ぐれもいさぎよきかな

古巣鶯
大口鯛二

うぐひすの春のはつねをしら雪の
ふるすながらにきく山べかな

松
西川須賀雄

時わかぬすゝりの海もはるめきぬ
　まなびの窓のうめのにほひに

海路　上地　信光

浪の上にうかぶいへしま家ならで
　やがてはつべき舟路をぞおもふ

春氷　藤井　行麿

春風にとけねいはゐのあつこほり
　あつあはかゝれとりて削らむ

松尾多勢子　佐々　豊水

春やさしけぶりよりなほ高き名は
　あめの下にぞかをりみちける

新年興　米山勝次郎

少女子がとしのはじめの鞠あそび
　よそにきくさへ楽しかりけり

竹間鶯　栗原宜太郎

笛にさる園生のたけにやどしめて
　ふしおもしろくうぐひすの鳴

春鶯呼客　前田　朗子

うぐひすの聲にひかれて思はずも
　梅のはやしにわれはきにけり

柳原　愛子

わが庵は珍らしからぬうぐひすの
　聲とめてくるひとぞたえせぬ

小池　道子

うぐひすのこゑきかんとかあさ霞
　まだをぐらきに君がきませる

松平　健子

ひとしれぬわが隠家もうぐひすの

雜報

聲をしるべにとはれぬるかな　鳥尾廣子

ぬししらぬ庵もけふはとひてけり
鳴くうぐひすの聲をしるべに　山田稲子

鶯ののどけきこゑをあるじにて
わが柴のとをひともとひけり　鶴久子

鶯のなくのべとほく來てみれど
かすみがくれに家もありけり　中島歌子

さく梅の花のあるじはしらねども
こてふに似たりうぐひすの聲　千々波橋子

山家立春

さらでだに人目すくなき山ざとを
今日たちかくす春がすみかな　河野文子

雪中梅

春霞まだふかゝらぬのべのうめの
こずゑに匂ふゆきははあかも　溝口奈保子

松間霞

住の江のきしの松がえいくちよの
春をこめてぞかすみたなびく

●忠誠なる老女　長野縣小縣郡上田町字常磐城に住める中澤文藏氏の曾祖母しの子といへるは、文化六年正月の生まれにて、本年實に八十四歲の高齡なるが、その壯健なることは、壯者にもをさ〳〵劣らぬ程なりといふ。さて、先つ年憲法發布の際、しの子も、養老金の恩賜に預りしが、普き御惠の、數ならぬ賤が身にまで及びぬることを、深くも感じつゝ、いかで、老が身にも及ばむ程の心盡くしに、聖恩の萬が一つをも報い奉らむやとて、去年の秋の頃より思ひおこして、糸製ることを始め、少しも他人の手を借らずて、遂に、精しく妙なる白絹壹匹を織りあげぬ。かくて、十一月に至り、この絹献納の儀を、宮內省に願ひいでしに、其の筋にても、しの子が、いとも赤誠なる心の程を知ろしめされ、且は、年高き者なりとの故をもて、特に、この事許させ給ひけれど、しの子の喜びはいふも更なり。家族のものども、此の上なき面おこしと勇みたちつゝ、去ぬる一月十七日、當主文藏氏は、郡役所に出頭て、奉呈方を依賴したりとぞ。あはれ、八十あまりの年を迎へて、いと壯康なりといはるゝものは、世にもいと〳〵稀にして、喜ぶべく祝ふべき限りなるべきに、けなげにも、老の弱肩に太手すきとりかけて、ひきいでし糸の一すぢに、君を思ふ心のあやを織りいでけむは、亦比ふべきものもあらずなむ。吾人は只望む。將來皇國人の母となり、祖母とならむものは、必この老女に肖ねよとぞ。

●孝行なる少女　富山縣富山市大田口

なる大坪某といへる老夫婦の娘なり。名をそろと子といひて、今年十七歳になりぬ。さてこのそと子の、老父母に事へて孝なるは、尋常の様にはあらず、いと／＼心を盡くして、かしづき養ふに、近邊の者も賞ではやさぬはなく、又、そのみめかたちさへ、人に勝れたりけれど、己が子の妻には、かゝる者こそ宜はしけれとて、媒介をもて、縁組を申入るゝ者もいと多かり。さるに、そと子は、いつも／＼、妾老いたる兩親をすてゝ他に適くこと、いと心憂く侍り、今暫 思ふがまゝに孝養を盡くさせ給へとて、之を辭し、ます／＼、父母を大切にせり。さて、この程の事なりとか。老父は持病さし起こりて惱み苦めるに、ある人、海水浴の、その病に効あるよし、物語りしかば、そと子は、これをきゝて大に喜び、身を切るばかりふきすさぶ立山おろしを物ともせず、ふりつもれる雪を冒しつゝ、婦負郡なる四方濱といへる濱邊に行きて、海水を汲み來り、日毎に、据風呂をたてて、老父を入浴せしめ居るとなむ。あはれ。この娘、學校にありて、教育を受けしこと果して幾年。修身の講義を聽きしこともまた果して幾度ぞ。吾人は、必 その長からず、多からず、天性より然るを知る眞に是雪中の梅花なり。世の女等の鑑なり。

●貞操ある婦人　とは三河國岡崎町なる鳥羽すず子といへる人なり。夫は大作といひて、陸軍の中尉をつとめ居しが、去にし明治十年の役に、田原坂にて、君の御爲に討死したりき。その頃すゞ子は、年いまだ若かゝりけれど、人々再び他に適

かひことをすゝめしに、すゞ子は、斷乎として之を却け、その後は、亡き人こふる袖の涙を拂ひつゝ、哀に沈める老母をいたはり、夫が形見の幼子をいつくしみ、假にもあだし心を起こさずて、十年餘の年月を、一日の如く送りしかば、近き邊の人々皆賞めはやさぬはなかりき。さてこの程に至り、老母は病にて死りしが、生前すゞ子が心を盡くして介抱したりしかば、人々かばかりの介抱うけし老母は、死にてもいみじき幸福者よといひあへる程なりとぞ。さても、このすゞ子の如きは、古の武士の妻にも、をさ／＼劣らぬ者といふべし。な言ひそ。今の世の人はこと／＼く古の人に及ばずと。

行に敏くせよ

言の葉はともあれ。言ひ足らはぬもよし。とゝこほりてさわやかならぬもよし。その行に至りては、足らはぬことなく、とゝこほることなく、必全くせむと心がくべし。もし、行にして欠くる所あらむには、その言の葉は、いかに滑に言ひまはし、いかに巧にいひかざるとも、貴しとするに、足らざるなり。さて、今の世の大方の人のありさまはいかに。萬の學びの術の開けしより、男も女も、口に敏き者は、日に月に出で來めれど、行は、やゝ／＼にすたりゆくこそ淺ましけれ。あはれ、言に敏き時は行に鈍くなるてふ天則にてもありぬるか。さるにても、殊更に、言に鈍かれとは、古よりも敎へぬなり。言にも敏く、行にも敏かれといふなるべし。これ人たるものゝ願ひなり。もしかくあらむと思ひなむ、

難きわざにはあらず。言ふ所は必行ひ、その身の一擧一動をして、其言に恥ぢざる様にするにあり。

そゞろありきの記　何事ぞ。何ごと起りしぞ

そ、四方より集り來る人、たちまち山の如し。何ごとにかと見れど、あられもなきこと、身はひめごぜの(カ)。長やかなる羽織うち着、近眼にやあらむ。眼鏡かけたる女の、車夫とあらがふなりけり。こゝまで五錢といひけれどこそ、乘り來つれ。十錢。そが二倍ならずや。さる不當の賃金は、拂はれじ。車夫は忌々しげに笑ひながら、車の料は五錢にて事足れり。路すがら。御話の相手せさせられて、いたく暇とりつる。その料いまだ。そは又何事。その料だされぬとか。あまりの。よしわれに了簡あり。車夫は笑ひの顔をすて丶、慍りのさましたり。傍の人々、やれ。女壯士萬歲。婦人の龜鑑。なさけなきことといふものかな。わろき婦人の龜鑑にこそあれ。われらの知れる人たちは、皆かからぬものを。さても女はいかにかせむとすると、うち見やれど、さすがに耻しくやなりけむ。白き錢だし、人かきわきて往ぬ。車夫はつぶやきながら、群集の人を追ひ散しつゝゆく。あはれ惡くき車夫よなど、女を辨護し給ふな。眼鏡かけたる女と、車夫とひとしなみのものか。大方あらぬなるべし。もとよりいそぎもせぬに、車などは贅澤なり。少しは運動もせよかし。挽くものにはあしかくるなどは、沙汰の限りなり。ましてそれと爭ふものをや。數多の人に嘲けられつゝ。あなうとまし。十九日のひるすぎ御茶の水橋のはしのかたにて。

餘芳

みくるまのあと（つゞき）

廿四日、小雨をり／＼ふる。今日は、かねて、午前八時にたゝせたまふべき、みさだめなりしを、七時にせられたり。さるは、西村大阪府知事の、みむかへにまゐりて、大阪人の、まち奉るありさまを啓し、博物館に、御立寄の事を、ねぎ申しゝによりてなりとぞ。いとかたじけなし。しかるに、きのふよりの雨にて、こゝより、一里ばかりなる大和川の、明治橋のはし臺の石、かきくづれたるよしにて、みくるまかよひがたく、あがたのつかさ人たち、あしをそらにまどへど、みさだめのときには、つくろひがたしとて、かしこけれど、ひるすぐるころまで、御いでたちを、のぞさせたまはむことを、ねがひ申す。小牧知事も、いたう、かしこまりたるに、このよし、宮の大夫より、啓し奉れど、天災は力およばぬことなり。よろしきときにこそ、たつべけれ。きのふけふ、うへには、海路よからず、しはきりのうちに、と

とこはらせたまへるよし。それをおもへば、けふひとひ、こゝにくらすとも、よろづ、たらはぬことなき家のうちあれど、みふねのうへよりは、こよなかるべし。ゆめ、あがたのつかさよ。いたう、こゝろをくだきて、しひて、ことなせそと。あつきおほせごとありしよし、宮の大夫より、ほのうけたまはりき。あがたのつかさの、いかばかり、うれしかりけんかし。

　ひよりまつみふねのうちやいかならんきりたちわたるあらなみのうへに」と、後にうけたまはりし御歌も、このほどのことなりけんかし。いとありがたくころ。されど、あつきおほせごとに、人々、いとゞ、つとめたるけにや。九時ごろには、みくるま、わたさるべしといふ。いとうれし。猶鮫島工兵中佐を、つかはされて、みせさせたまへるに、あやふきこともなしと、申すによりて、九時にたゝせたまふ。みとも例のごとし。法隆寺の南門のまへを過ぎて、町をはなるゝところに、龍田の新宮あり。龍田村戸数百ばかりなり。家ごとに、提灯、まくなどかけて、いとにぎはゝし。龍田川のはしを、わたりてゆけど、きりひらきたる山路にかゝる。字西山といふよし。これをこゆれど、字勢谷といふ村なり。信貴川のはしをわたりて、むかひに、

官幣大社龍田神社のしるしあり。これより、八丁といふ。大路は、左のかたにそれて行く。今朝つくろひたる、大和川の、明治ばしにかゝる。いとよき橋なり。みくるま、ことなくわたらせたまふ。川むかひに、里人の、み車迎へ奉るもの、いとおほし。少しゆけば、大和川の落合に、小川あり。はしあり、出合ばしといふ。このわたり、王子村なり。この道、すべて、大和川のきしにそひてゆく。宇藤井村をすぐれば、奈良縣と大坂府との、管轄さかひなり。これより、河内國安宿郡國府村なり。國豊橋といふはしのわたり、けしきいとよし。橋のながさは、八十間あまりといふ。これをわたれば、大和川、左にみゆ。堤のうへに、里人おほくつどひて、みくるま迎へ奉る。柏原の入口の左に、道明寺のかたへゆくはしあり。新大和橋といふ。國豊ばしと、このはしとのあひだ、二十丁ばかりといふ。ひとめにみわたされて、大川の、なゝめにめぐりたるかはらのけしき、いと〳〵よし。柏原の御小休所、寺田七郎平の家に、つがせたまひしは、十時二十分なり。この家のかたへに、あらたに停車場をまうけ、かたへに、活花などしたり。また產物をつらねて、よろづ、こゝろもちひみゆ。此家に、古木の梅あり。めづらしきものあり。花のころならま

しかなとぞ、おぼゆる。十二時といふに、滊車にのらせたまふ。このわたりは、みわたしひろく、けしきよし。八尾、平野、天王寺を過ぎて、湊町の停車場につかせたまふ。一時三十分なり。陸軍の祝砲奏樂あり。これより、たゞちに、みくるまにて、大坂博物館にいらせたまふ。まちまうけたる町々のよそほひ、田舍のめうつしには、おどろくばかりなり。博物館の門に、迎へ奉る人々、いとおほし。いらせたまへば、今日をはれと、つらねたる、くさぐ\/のものども、おろかなるはなし。みめぐりたまひて、いこはせたまふほどに、清樂の合奏などあり。おまし所は、こたび、あらたに、此館のかたはらに、まうけたるにて、いときよらなり。繡錦堂とぞ、名つけたる。さるは、府知事の、こたび、行啓奉迎の詩に、繡地錦天十萬家と、いへる句をとれるなりとぞ。又知事の記文などもあれど、ながければ、こゝにはぶきつ。ここをたゝせたまひて、天神橋とほり、たゞちに、梅田の停車場に、いらせたまふ。午後四時なり。ことに、大坂慈惠院、博物館に金そこばくをたまふ。こゝにても、祝砲、奏樂先の如し。陸軍のつかさ人たち、あまたおくりし奉る。これより滊車にて、舞子へと、いでたゝせ給ふ。神崎、西宮をへて、神戸にいたる道すがら、右に

武庫、有馬の山々を見、左には、灘のさと／＼の、いらかのうへより、海のおもてを、みわたしたるけしき、いとよし。このわたり、生田のもりをはじめ、名所、いとおほかれど、はしるくるまのうちには、そよといふまに、過ぎはてぬ。三宮、神戸かけて、みくるまむかへ奉る人、ひまなく、たちつゞきたり。それより兵庫、須磨、垂水をへて、舞子にいたる。かゆ、もしほたれけんすまのうらわも、いとなつかしうみゆ。やどりのまへに、あらたに停車場をまうけたり。よろづ、いとよくしなして、きよらなり。汽車をおりさせたまへど、御かちにて、みやどり、河合宇兵衛のいへに、いらせたまふ。五時四十分あり。こゝは、おのれ、むかしより、しど／＼ゆきかひて、みなれつれど、このさとの松原は、ことゝころのものとは、ひときは、ことにて、えもいはずをかし。今日は、この松かげに、くれなゐの提灯、數しらず、つらねかけたるが、きよらあるしらすに、うつろふさま、まことに、にるものなくをかし。日くれて、花火などありしかど、をりわろく、雨かせはげしく、よろづくちをし、こゝに、須磨寺の寶物など、もてきて、御覧せさす。波のひゞきも、いとたかきに、きゝおれたまはぬ、おほんたびねに、うへのおほん舟路をさへ、おぼし

やらせたまふに、さこそ、やすいも、したまはざりけめ。
ゆめさめてみふねのうへをおもふかなまひこのはまのなみのさわぎに」といふ御
歌を、うけたまはりしこそ、いと〳〵、かしこかりしか。夜ふけて、雨風やみたり。
今日は、山陽鐵道會社よりとて、みとものものへ、酒、さかな、おくりたり。酌ど
る女ども、このわたりのものにはあらず、いとめづらし。ことに、あすは汽車にて
たゞちに、京都に、かへらせたまふこゝろゆるびにや、いづくのやどりも、いとに
ぎはゝしかりき。

（つゞく）

教の庭

二月二十日兼題　梅薫枕　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　愛媛縣松山市萱町六丁目　田村千代子

よるはまた枕にかよふうめが香を
たもとにのみと何つゝみけむ

地　京都市上京區知恩光院通從屋町下ル　森田とき子

たが宿のうめの立枝やすぎて來し
閨もるかぜの香にゝほひける

人　千葉縣香取郡橘村　雲井なほえ

手枕にうめが香さそふよな〳〵は
すきまもりくる風もいとはじ

あさまだきいめともわかず現とも　武智卓能子
分かぬまくらに梅ぞかをれる

何時のまに軒の梅が枝咲きにけん　狩野　秀子
まくらになれぬ薫りこそすれ

うたゝねのつきかげうすき手枕に　高井　繁子
薫るもうれしうめのしたかせ

枕べの繪もやかをるとおもふまで　勝家　貞子
はるの夜ふかく梅が香ぞする

うたゝねのゆめの枕に小夜ふかく　勝家　良子
かをるもゆかしのきの梅が香

我がやどの軒端の梅やさきつらん　冲田みさを
さ夜のねざめの風かをるなり

梅が香の我手まくらにかをる夜は　平山ゆふ子
そのことゝなく寐られざり鳧

吹き送る風のたよりにひとりねの　千々波橘子
まくらも夜たゝ梅が香ぞする

いつのまに霞のそでをもれにけん　道廣八重子
我たまくらにかよふうめが香

梅が香のまくらにかをる春の夜は　島田　悦子
あがくもがなと思はゆるかな

梅の花まくらによたゝかをるなり　松田　靜枝
つねにもかもなこの頃にして

かをとめしそでを枕にねぬるよは　松田やえ子
夢さへかよふうめのしたかげ

たをらんと思ひし夢はさめはてゝ　橋本かずゑ
今朝はまくらにのこる梅が香

うつら〳〵寐るも寐られじとこ枕　田中こま子
今日さしいれし梅はかをりて

ゆめのうちになはかをるかな袖枕　田中あさ子
手折りし梅の香やのこるらん

すきまもるかせのたよりに手枕に　瀧川きみ子
夜な〳〵かよふのきの梅が香

おもひねの夜半の枕にかよひ來て　飯田　梅子
夢おどろかすまどのうめが香

窓さゝで今宵はねなん手まくらに　瀧川けい子
あくまでかよへ庭のうめが香

閨のひまもりくるかぜにしき妙の　山中いと子
まくらもにほふ夜半の梅が香

心あらむとはましものを梅が香の　中村　備子
わがまくらべにはひぬる哉
梅が香は園にあまりてうたゝねの　高橋　安子
たまくら近くかをり來にけり
十重はたへ霞をもれてねやの戸の　高橋　玉子
まくらにちかく梅が香ぞする
心なくむすべるゆめの手まくらに　堀内　安子
あまりてかをるまどの梅が香
梅が香のかよふ思へばはるの夜は　松井たまみ
ねざめするこそ嬉しかりけれ
晝のまにながめし花の小夜ふけて　高野はる子
わがたまくらにかよふ梅が香
心なくうめのゝきばにかりねせむ　河野みゑ子
まくらの香をも人やとがめむ
友もなき夜半の寢覺をなぐさめて　植木　鋼子
たまくらちかくにほふ梅が香
思ふどち梅にうかれていねし夜は　南大路素子
まくらにさへも薫るなりけり
見しゆめを現にかへしたまくらに　南大路正子
あやしくにほふ夜半の梅が香
うぐひすのねしたの聲も匂ふらん　南大路芳枝
まくらにかよふ夜半の梅が香
うつり香の手枕にさへにほふなり　中村　友子
梅のさかりをゆめに見るまで
梅が枝を床にかざしてねぬる夜は　川井田さよ
まくらに匂ふこゝちこそすれ
わが庭の梅のさかりとなりしより　楢崎　光子
夜半のまくらも香に匂ふなり
我ろのゝ梅やさきけんうたゝねの　久保田律子
まくらたづねてかをるはる風
まくらべに今朝薫るなり花がめの　水上千代子
梅は夜半にや咲きそろひけん
あけやらぬ枕のもとにかをるなり　飯室登美子
軒端のうめにかせやふくらん
よもすがら枕にゝほふうめが香に　飯室　照子
夢さへかをるこゝちこそすれ
あさまだき枕にかよふうめが香は　山口　明子
軒端にみつるあまりなるらん

夙く起きていざやおがめん明方の　山口　豐子
まくらとひ來るうめの花の香

よもすがら枕にかよふうめが香は　竹内すい子
老のねざめの友にぞありける

閨の戸をもれてのどかに匂ふかな　龜井　梅子
まくらにかよふ梅のしたかぜ

窓ちかくうぐひすなくと見し夢の　佐藤　家子
さめてまくらにかをる梅が香

ねやの戸のすきまの風や通ふらむ　落合みさを
手まくらちかく梅かをるなり

何時のまに綻びにけんおもひねの　鳫木　稻子
まくらにちかく梅かをるあり

梅が香のいとなつかしく薫るなり　奈良しん子
むかしを見つる夢のまくらに

今までは只ひとりねの手まくらに　青木　春子
かよひそめたるにはの梅が香

たきものにかをりあらそふ梅の花　佐々有鄰子
閨のまくらにふかくしみぬる

春ごとにあかぬ薫りもねやの戸の　小畑　穗子
まくらにかよふ軒のうめが枝

春の夜のゆめのうき橋わたり來て　松田みね子
わが手まくらゝにほふ梅が香

まくらべの燈火夜半にうごきつゝ　諫山てい子
庭のうめが香かよひ來にけり

閨の戸の隙間もりくるこちかぜは　山手はお子
梅が香かよふしるべにぞある

夢さめていとゞ淋しき手まくらを　矢野みさを
なぐさめ顔にうめぞにほへる

吹く風のさそふをうしと思ひねの　萩尾すみ子
さむるまくらにかよふ梅が香

かねてより友とちぎりし梅が枝は　三浦たの子
今宵まくらに香ぞかよひける

手折りてし夢はさめぬる有り明の　井戸あや子
まくらにゝほふ園のうめが香

うたゝねの夢おどろかし梅のはな　山崎　粂子
我たまくらにかをる夜半かな

思ひ寐のゆめさめはてゝしき妙の　河野　文子
まくらゝにほふまどの梅が香

ねやの戸のすきまもり來て枕べに　森田てる子
匂ふもうれし夜半のうめが香

吹く風にさそはれきつと見し夢の
さむるまくらに匂ふうめが香　森田とく子

うぐひすのねしたの螢や匂ふらん
夜たゞまくらに薫るうめが香　稻田　晴江

うたゝねの枕にかよふはるかせに
夢ばかりなるうめが香ぞする　稻田　君子

夜もすがら結びし夢もかをるまで
まくらにかよふ軒のうめが香　藤井つや子

二月廿日兼題　細川忠興夫人の傳を讀む

天

大坂府西成郡今宮村　松田　靜枝

手枕さむき夜半の嵐に寐ざめぬ心すゝむまゝ殘れる燈火かきたて夜と共に讀み明かしゝは館の血烟とて細川忠興が夫人の傳を記せるものなりあはれ今は十年の昔母上の膝下に三戸野の里の物語を聞きし時は幼な心にも物の哀をしみ〴〵おぼえぬかくて五年三年ふり假名をたよりて難波の館の物語をよみし時はそゞろに其の昔の思はれて物かなしうなりぬあはれその哀れとおもひしも幼な心の哀なりけりろの悲しとおもひしも昔むかしの物かなしさなり今はなか〳〵に哀と思ふのみか悲しと忍ぶのみかそが名殘りの露をさへ我か身の上に思ひくらべて袖は紅涙にもろくも濡れぬあはれ弓は袋に劍は鞘に物しづかなる今の大御代いづこの都にかゝる節義の婦人はあるかいづちの鄙にかゝる貞操の乙女はあるか月やいかに梅やいかにとやをら窓を開ければ月暗うして梅の香ひもなくふりくる六つの花びらみごとに松の梢を埋めぬ折からの雪をり柄の松いとゞ夫人の節義と夫人の貞操の今さらなつかしくゆかしき心地せられてなむ

地

武智卓能子

夫は天なり天に事ふる道をつくして終に身を殺すに至るこれそ眞の女にはありける細川忠興の夫人惟任氏の如きは實に古今に希なる女丈夫なりけり凡そ今の世女の致いよ〳〵備りて女の道いよ〳〵廢れ貞烈の志操を有ちてこの濁れる仇浪の中に立てるもの天下を擧げて幾人もなきこそいと〳〵うたてけれあはれ夫人を黄泉に起こして今の世のさ

まを見せたらましかばいかに心愛く思ふらん正に居りてよく自ら守り變に處りてよく身を潔くし玉へる夫人の傳を讀みて昔をしのぶ心のお堪へねばやがてかくなん

人

長野縣長野町　勝家貞子

貞烈は女の德として守るべきことになむされどこの道はあやまり易くしてさせることもあきに身をはかなくなしはてゝ潔よしと思へるもの古より其例少なからずこゝに細川忠興の夫人はよく此道を全うせるものなり始め父の爲に夫に斥けられて山中にあるときあだにながらふべからざることを戒めし人ありけれどもいかに女の身とてみだりに朽ちや果つべきとていとゞ辛き目を忍びつゝ再び夫につかふることとなりぬ一たびと起りてまた去りがたけれどいまはとていさぎよく其身を捨てぬこれまことに貞の顯はれて烈となりたるものになむあはれかゝりてものみだれ〳〵てまことの道の明かならぬ世にしもましてて父のさかしまなる心にも似ず正しき節を守りてあだし小道にふみ迷はざりしはますらをとてもなか〳〵に及びがたかるべきふるまひにこそ

佐々有鄰子

天地のひらけそめし時より皇國は貴きも賤きも貞烈の夫人の傳をかきかぞふれど濱の眞砂のかぎりなく山松の葉のよみつくされぬほどなるにわきて御代の名を天正といひ慶長といへる年の天下に吳竹の節操たかき忠興卿の夫人の三戸野の山さとにすてられ玉造館に血煙たてたまひしは當時ためしなき女鑑にもなもまし〳〵けるそも〳〵この夫人の事跡は開卷(ひらきみ)見る細川家譜につゞらあれどはゞかることの多けれど文よみさして筆の命毛いさゝか涙ながらにかくなむ

上原とみ子

おのれ夫人の傳を讀みて數多たび感涙を催しぬあはれ此人にして此父あるか此人にして此厄あるか父光秀の叛を圖りける時夫に向ひて曰ひけらく妾もし男子ならんにはいで鎧の袖にすがりても諫め止むべきに手弱女の事にしあれど甲斐なきこそ悲

しけれ願くは御身だにゆめなか〻つらひ玉ひそとて歎きて止めけりとぞ智勇を兼ねし光俊すらもておましつることなれば夫人の心如何ありけむかくて夫を全うせしも父は不義に陷りぬさて身も三成の厄に逢ひて失せぬ憐むべきかなされど之によりて姦臣の心を寒からしめ夫の累をなさず永く烈女の名を留め父の醜名と伴ひ傳はりて世の人の心を和ぐされど夫人は生父きてを不義に救ふと能はざりしも死して孝を全うするものと謂ひつべし實に尊むべきかな

田村千代子

豊臣家のおとろへゆくを歎きて大坂方の人ども事おこせるを徳川家のいきはひ猛なる世なれど天下の諸侯今は身をたつると家を滅すとの境なれはいづれにつきてよけん思ひわづらへるをまいて自は關東にありて妻子は大坂にのこれるをやされば大坂にては其妻子を人質として悉く城のうちに移しいるゝ事に定まりぬあはれ千萬の敵にむかひてうしろは見せぬ武士も愛しき妻子の爲には心ひかれでやはあるべきこのさまを見て細川忠興ぬしの夫人明智氏はさとりふかき女なれどなどかは命をしみて身の恥を後の世にのこしきたなきそしりを夫にとらすべき今こそ妾か身を捨て君が百年の恩に報ゆる時なれと三人の幼子をさしころしかへす刄に貫ぬかれて朝の露ときえうせぬるは貞とやいはん烈とやいはんかくてこそ遂に人質のさたもやみにけれ忠興ぬしは之を聞て髮さかたちて憤り命にかへて戰ひたれど大なる功をあらし身をたて家をおこしぬるも皆此夫人の眞心ありかしこの事しるせる書をよむたびに涙にむせびて其幸なき身を哀しみまたうちゑみてそのをゝしき心をはむるになん

山崎榮子

いにしへより貞女とたゝへらるゝものいと多し烈婦ととなへらるゝものもいとさはなりされど貞烈またき婦といはるゝものにいたりてはいくそはくかある細川忠興夫人こそ世にもめでたき貞烈の婦といひつべけれ天正十とせの夏父みことのそむき玉ひし故を以て三戸野の山中に幽せられし折も節

操を守りてからきうきめを堪へ忍び遂に夫にゆるされぬ三成の兵どもをゐておしよせかこみしときはいはけなき己が子を心にもあらで刄にあて自らもはかなく草葉の露と消え失せ夫の名をばけがさざりし其いさを見るものきくものをして袖をぬらさしめ遠く後の世のかゞみとぞなりにけるおのれけふしもこの歴史讀みて落つる涙をおし拭ひつゝかくなむ

沖田みさを

およろ世の中に女といふものはいとさはなりさるを刈菰のみだれに亂れ玉ぼこの道てふみちもわかさる世にまさきつら正しきこゝろ一すぢにますらをがとり佩く太刀の柄の間もみさをたゆまず千萬年の後の世に女のかゞみともいひつべきは實に細川夫人にこそあれ夫人の傳を見るごとに今の世のをみなの風をおもひ出られてなむ彼の貞節のためには玉きはる命をも何かをしからじとの言葉はよも何人の口よりか出づべき夫のために家をまもらて空蟬の身をさへころさず雄心はそも〳〵誰の勝にか備へたるおもへば〳〵いとも〳〵歎かはしきことのかぎりにこそあはれ世の人此かゞみに向ひたらんには如何ばかり己が心の見にくゝやあらん

中村　嬋子

吾すめらみくには外つ國とことかはり婦女子の身にしていとも尊く美しき貞操てふ德古より備はり上は后の宮を始め下は賤の女に至る迄貞の名を世に知られたるものいと多かり中にも彼の越中の守細川忠興夫人の如きは稀なる行ひになんありける夫人は日向守光秀が三女にて忠興に嫁きぬ程經て夫は光秀の悪逆を憎み夫人と緣をたち三戸野の山中に人を付て守らせけり程もあらせず山崎の戰に光秀等亡せにけり此時夫人の許にあるもの死をすすめしにうべなはずして曰はくいまだ良人の命せとあるにあらず身の屑きを示さんは易けれど貞節の道に背くは心ぐるし軈て夫の命を待んと年月を重ね難苦をたへ忍び節を守りしかば秀吉等も其操を感じてこれを許し故の如くに住はしめけり後石三田成城中に人質せんと夫人の許に言ひ送れり其

由を聞きて曰く吾が夫今は東軍に在りこの時こそ死して操を立つるべきなれど臣等に傳へてわれ今自殺すとも必敵兵に弓をひくなかれと後門を鎖しめ匕首をとり三子を刺しその身も刄に伏してけりこの事を聞きて大におどろき人質も止まりぬときく人感賞せぬはなかりき實に此夫人こそ我國の女子としてはぢず此戰國の世にありながら正道をまもりし其心の雄々しさよ文明の女子達もこれに劣らぬ心得こそあらまほしけれ

高橋　安子

昔より世に名高かりし人々の傳をよみもてゆくに父母良人に事へて孝順貞操を盡しては身をもかへりみず命を捨てよく其道を極めたる人あまたある中にもかの細川越中守忠興の夫人こそ貞節明かにましてみめかたちうるはしくうまれつきかしこかりしとかやかくて忠興に嫁きしよりは世は麻のごとくみだれにみだれて遠き山中にわびしくも多くの年月を重ねその後折から石田三成人質にせむとてせめけれバ今はとて其をつとを思ひ主をおもひ遂に二人の男女をさしころしみづからも刄にふして死しゝこそ女の道をあやまたざりし心の雄々しさにはありけれとほめたゝへぬものなくげに萬代の末迄も人の妻の鑑ぞかし

植木　鋼子

寒き夜のつれ／＼火桶の本に物の本などあまたとり出でうち見る中に細川忠興の夫人の傳有り夫人初め父の事により斥けられて三戸野の山中に多くの年月いくその艱難を凌ぎ恥を忍びて貞節を守りし事世間思慮厚からぬ女のよく堪へあたふべき事ならんやされどこそ秀吉もゆるして故のごとくすまはせられしあれ其後石田三成德川家康と事あらんとせし時侯は旣にいでゝ關東に在り三成夫人諸公子を質とし取り置かんと思ひ計りよの中さわがしければとく城中に來り給へ若し此命にしたがはざらば雜兵をして捕へんといはしめたりなみなみの人ならんには恐れまどひて手足の措處も失ふべからんを夫人少しも驚くけしきなくやがて家臣に命を傳へ門をとざゝしめ二人の幼子を刺し殺

し其身も同じやいバに伏してはてぬるくだり見るに目もくれ感涙あふれて思はず袂をうるほしぬあゝ夫人いまはのをゝしさよかゝるききふの折から其一身はとまれかくまれ忍び難き恩愛のきづなをたち死後をみださず近くは三成の奸計をとりひしぎ遠くは夫の志をはげまし遂に關原の戰に侯先鋒となり勝を得て熊本五十萬石を益封せられしも夫人貞烈の餘德といはざるを得べきか實に益荒男も及び難き行ひ天の下又あらぶもの有るべしや

中村友子

一旦の悲哀に沈みて自害せんは中〻に安かるべし艱難の中に操を全くし節を立つるは丈夫も難しとするところなりあはれ細川忠興夫人は丈夫にも劣らざる女丈夫といふべし

父明智光秀君を弑して最愛の夫に離別せられ三戸野の露深き草の庵に幼兒二人と共に詫び住居し玉ふ心の中いかに哀れなりけむ父に孝せんか逆臣なるを如何にせむ夫に仕へんか離別されしをいかにせん若し凡庸の女ならんには已に自害せしならむ實に夫人の心の中は死ぬにもまさる悲ありしならむ死ぬに死なれぬ責任ありしならむ世人の臆病と嗤けり逆臣の人と詈りしは夫人の心にはいかにつらかりけむ

死ぬべき時に死なざれは死ぬるにまさる耻ありとかやあはれ夫人は能く其期を誤らざりし烈夫人といふべし

夫忠興公家康公に從ひて關東に打向はれし折石田三成夫人を謀て城中に招く夫人妻子質となりたらんには夫の心おのづからよわりなんとおもひて固く辭す三成遂に兵を遣して脅かさんとせしかバ夫人も今はとて少しも動かず徐ろに一家の仕末を定め遂に二子を殺し東方を拜して自殺し玉ふ其心バへおそろしきまでにをゝしゝともいさましや、

妾此傳を讀む毎に夫人の心の中を思へば胸逼まり心苦しさに堪へずされどいたく此傳を讀むを好めりあはれ細川の淸き流れは幾千代までも淀まざらむ其淸き流れを酌みて大和魂をみがゝバ其光り日月と共にかゞやかざらめやも

ヘルス

定價
- 六合分　十六錢
- 一升二合分　廿八錢
- 三升分　六十五錢
- 六升分　一圓五錢

郵税
- 二錢
- 二錢
- 四錢
- 八錢

東京は本舖に於て大坂は支店に於て配達す●為替は東京は神田郵便局又は三井銀行へ大坂は順慶町郵便局又は三井銀行へ振込あれ●郵券代用は一割増し

効能

身體の薄弱なる人、過度に精神を勞する人、婦人産前産後、記憶力の弱き人、忍耐の乏しき人、氣力缺乏貧血諸症、諸病の衰弱、過淫より來る衰弱、諸出血より來る衰弱、病後の恢復期等に効顯著なり又肺病胃病患者には最良の滋養飲料たるとは諸大家の實驗證明せらるゝ所なり

諸大醫證明之例

海軍々醫總監　貴族院議員　醫學博士**高木兼寛君證明**　貴舖製造の「ヘルス」は滋養に富み飲用し易きを以て患者は勿論無病者と雖も之を服用すれば其健康に大なる裨益ある者と認む

山龍堂病院長　前大學醫學博士**樫村清德君證明**　貴舖製造の「ヘルス」は實驗日尚ほ淺しと雖も蛋白質に富み消化容易にして頗る滋養に適するものと信す

婦人科産科專門　櫻井病院長醫學士**櫻井郁二郎君の證明**　貴店製造の「ヘルス」は分拆表に依れバ有効無比の良品なると賛成致候

此類ノ證明夥多アレ𪜈紙幅限アルヲ以テ掲載スルヲ得ス

注意

「ヘルス」は日本全國有名なる藥種商賣藥商洋酒店鑵詰店料理店雜貨店等に販賣せり

「ヘルス」は賣藥に非ず取次をなすに面倒なく病人は勿論一般無病者を得意とするか故に販路最も廣し

「ヘルス」に模造品あり「ヘルス」の二字に注意せられよ

ヘルス元發賣

東京神田區鍛冶町
電話千八十一番
森田商店

大阪心齋橋筋
南久太郎町
森田支店

正札

袋物 莨入○紙入○弗入手提類種々

金銀 莨入前金物○貴婦人用帶留及指環類

象牙 煙管筒○巻莨入類

煙管 金銀製及金銀張分類種々

茶器 銀製湯沸及急須茶卓類種々

御誂物随御好に調製仕候

弊舗義江戸城御隆盛の時代大奥并に大方顧客の御引立を蒙り爾来年々盛大に趣き候段奉鳴謝候に付御禮の爲め一層意匠を凝らし高尚にて御爲筋の品質を相撰み新様の品は勿論舊幕時代流行の古雅なる品も種々澤山有之夫々正價を附し候間何卒舊に倍し御愛顧御購求被下度希上候

追而弊舗販賣の品は何品にても品質保証仕候に付御求の上若し御意に叶はず候節は御購求の日より七日以内にて其品物に破損汚染等無之候はゝ他品と交換し又は原價にて買戻し仕候且市内は御一報次第御伺可申上候

東京市京橋區尾張町二丁目八番地

伊勢新 長田新三郎

此娘嫁入(よめいり)の頭(かしら)

あせも○そばかす○吹出もの等始終できて永らく困てゐりましたが此頃諸新聞の廣告に有升宮中の御用となり内務省衛生試験所御試験済世界無類の衛生水おしろい

登録商標 **牡丹精**(ぼたんせい)

を用(もち)ゐましてから顔(かほ)の痛(?)く癒り性来の色ぐろも追々色白くすべ／＼ときめこまかに見違(みちがへ)る程美麗(うつくしく)成(なり)且甲號の分(ぶん)は美妙の良薬(よき)顔郁(いわかおり)と身躰を數時間離れません先一ト度御試しあそばせ

本舗は東京大傳馬町二丁目田中花王堂賣捌所は府下は勿論全國至る所小間物店に御坐り升○定價は○甲號壱圓三十五錢大十五錢小七錢五厘○乙號大十錢小五錢

○府下大賣捌所ハ
橘町四 丸見屋善兵衛
横山町一 脇田盛眞堂
仝二丁目 江川金布門
仝 菱屋金二郎
両國廣小路 大木口哲
村松町 岩瀬長造
濱町一 木原長生堂
人形町通 泉町角 菊壽
瀬戸物町 玉澤金八
本町三丁目 三寶堂
日本橋通一丁目 小紅屋
上槇町 萬金寄安川
鎧橋坂本町 德田多助
南新堀一 野村屋

八丁堀大通 和泉屋
南傳島町 白牡丹大西
銀座一 佐々木玄兵衛
竹川町角 丸屋松五郎
芝口二丁目 若葉屋
芝宇田川町 富士屋
麻布飯倉四ツ辻
赤坂一ツ木角 松下
麹町三丁目 藤田吉
全五丁目 真啓平
四ツ谷御門外 灰吹屋
麹町十二丁目 八ツ橋
傳馬町新一 白牡丹
傳馬町山形屋 定二郎
牛込通寺町 越後屋

小日向水道町角
本郷三丁目角
外神田仲町
小川町
一ツ橋通町
飯田町三町
神田鍛冶町
鍋町今金向
池ノ端
上車坂下
上野新坂町
山谷吉野町
駒形町角
本所元町
深川仲町

桔梗屋
兼やす
帝國堂
美好堂
つちや
鈴木梅吉
白牡丹
大文店
しからや
櫻香本舗
鶯谷青木屋
福島屋
中島屋百助
岡崎屋酒原
大坂屋與八



女生徒募集

來ル四月ヨリ新學年開始ニ付キ入學ヲ許ス志望者ハ本月中ニ申込ムベシ規則書入用ノ向ハ申越次第送附スベシ

二月

神田區三崎町二丁目十二番地
私立女子成立學校

社告

○代價は郵券又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず會員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未税の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月二回發行 五日 廿日

定價壹冊金十錢
三ケ月前金五十五錢
半ケ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿六年二月十九日印刷
同年同月二十日出版

發行兼印刷人　東京麴町區平川町六丁目十二番地　川崎直衛
編輯人　同　東京麴町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　國光社

(遞信省認可)

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁いす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

毎月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第五卷第八號目錄

發行所
麴町區平川町五丁目
國光社

(國光社印刷部印行)